

松本市文化財調査報告№32

松本市島立南栗遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1984.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

松本市島立南栗遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1984.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会



カラー図版1

佐波理鏡



カラー図版2

瀬戸灰釉平碗

序

この遺跡は、昭和58年度に着工しました県営ほ場整備事業島立地区にあり、当初から埋蔵文化財の存在が確認されている遺跡であります。

本年度の区画整理工事の着工にあたり、県・市教育委員会の皆様と事前打ち合わせにより、調査方法、調査期間、費用負担等について、再三御検討をいただき、発掘調査による記録保存の方針を決定しました。

調査の実施は松本市教育委員会に、全面的に委託を受けていただくことになりました。その結果奈良時代から中世にわたる住居址、墓址などから非常に珍しいと言われている青銅製の鏡をはじめ土器、鉄製品など数多くの遺物が発掘されました。島立地区の歴史を探るうえで貴重な資料になることと思います。

このように発掘調査が計画どおり完了できますことは、県・市教育委員会の適切な御指導とお忙しい中、調査団に参画され、発掘調査にあられた皆様の御尽力のたまものと感謝しております。

なお、遺跡発掘にあたり、島立土地改良区の役員、地元関係者の御協力と御理解により、支障なく調査が行われましたことに対して、あわせて謝意を申し上げます。

昭和59年3月

長野県中信土地改良事務所長 丸山 仁志

序

島立南栗地区は以前より古い時代の遺物を出土するところとして知られており、故藤沢宗平先生も関心をもっておられたところでした。この度、島立地区の県営は場整備事業が南栗遺跡周辺で実施されることとなり埋蔵文化財を保護するという立場から工事に先立って記録保存をするために緊急発掘調査を行なうことになりました。この調査は中信土地改良事務所から市教育委員会に委託され地元の考古学研究者、市教委職員を中心に地区のみなさまの御協力により実施されました。11月初めから12月中旬まで約1ヵ月半にわたる調査となり寒風や雪降りの中で多大な成果をあげました。平安時代初期頃の住居址や鎌倉・室町時代の住居址が発見され、またこの住居址内から出土した銅製品は保存状態も良くたいへん貴重な資料だと思います。栗林神社を中心としたこの地区が当時は多くの人々が住んでいた大きな集落であることがわかり島立地区の古代史解明に役だつことと思います。

今回の調査は記録保存という緊急発掘調査でしたが、開発事業が多発している状況の中で文化財はみんなの共有財産であり地下に眠っている文化財を後世に伝えていくという意味でこの調査の必要性を御理解いただければ幸いです。最後に、この調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました地元のみなさまをはじめ関係各位に心から感謝いたしまして序といたします。

昭和59年3月

松本市教育委員会 中 島 俊 彦
教 育 長

例 言

1. 本書は昭和58年11月1日から12月16日にかけて行われた、松本市島立・南栗遺跡緊急発掘調査の報告書である。
2. 本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託を受けて行ったものであり、農家負担軽減額分について国庫・県費補助事業である。
3. 本書の執筆は高桑俊雄が中心となって行い、その分担は下記のとおりである。

第1章	事務局
第2章 第1節	太田守夫
第2章 第2節	神沢昌二郎
第3章 第1節	高桑俊雄
第3章 第2節	平林彰、吉田浩明、山田真一、三村竜一、山下泰永、関沢聡、高桑俊雄
第3章 第3節	直井雅尚、吉田浩明、神沢昌二郎、高桑俊雄
第4章	神沢昌二郎
4. 本書の編集は事務局が行ったが神沢昌二郎が主体となり、滝沢智恵子の助力を得た。
5. 遺物の整理、遺構図の整理等については各々次の者が分担した。

復元・実測	滝沢智恵子、直井雅尚、吉田浩明、山田真一、神沢昌二郎
トレース	山田真一、山下泰永、神沢昌二郎
図整理	小口妙子、石合英子、滝沢智恵子、吉田浩明、高桑俊雄
6. 遺物の写真撮影は林宰男氏が行った。
7. 条里遺構については小穴喜一、小穴芳実氏に現地指導をいただき、陶器類は愛知県陶磁資料館の赤羽一郎氏にご教示いただいた。記して感謝申しあげる。
8. 出土遺物及び図類は松本市教育委員会に保管してある。

目 次

第1章 調査経過	
第1節 調査に至るまでの経緯と文書記録	1
第2節 調査体制	3
第3節 作業日誌	4
第2章 遺跡の環境	
第1節 地形と地質	9
第2節 周辺遺跡	12
第3章 調査結果	
第1節 調査の概要	19
第2節 遺構	25
1 住居址	25
第6号住居址	25
第1号住居址	32
第19号住居址	34
第7号住居址	38
第4号住居址	42
第24号住居址	46
第15号住居址	51
第25号住居址	54
第17号住居址	26
第2号住居址	32
第5号住居址	36
第8号住居址	40
第22号住居址	44
第9号住居址	46
第16号住居址	52
第18号住居址	26
第14号住居址	34
第21号住居址	36
第3号住居址	42
第23号住居址	44
第10号住居址	50
第20号住居址	52
2 建物址	58
3 土壇	68
4 溝	72
5 墓址	73
6 集石	74
第3節 遺物	75
第4章 結語	87

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置……………2	第25図 建物址3……………55
第2図 島立地区各地点土層概念図……………10	第26図 建物址3変遷図……………57
第3図 周辺遺跡……………11	第27図 建物址4……………61
第4図 調査地の位置(1)(2)……………15	第28図 建物址4変遷図……………63
第5図 東西トレンチI, 南北トレンチI 土層断面図……………17	第29図 建物址1……………66
第6図 南北トレンチI, 東西トレンチII 土層断面図……………18	第30図 建物址2, 土壇3～7……………67
第7図 遺構配置図(1)……………23	第31図 土壇11～14……………69
第8図 遺構配置図(2)……………24	第32図 溝2, 土壇8・9・15・16……………70
第9図 第6号住居址……………27	第33図 溝1……………71
第10図 第17号住居址……………29	第34図 基址1～3 集石1……………74
第11図 第18号住居址……………31	第35図 第6号住居址出土土器(1)……………89
第12図 第1・2号住居址, 土壇17～19……………33	第36図 第6号住居址出土土器(2)……………90
第13図 第14・19号住居址, 土壇10……………35	第37図 第6号住居址出土土器(3)……………91
第14図 第5・21号住居址……………37	第38図 第17号住居址出土土器(1)……………92
第15図 第7号住居址……………39	第39図 第17号住居址出土土器(2)……………93
第16図 第8号住居址……………41	第40図 第18号住居址出土土器……………94
第17図 第3・4号住居址……………43	第41図 第1号住居址出土土器(1)……………95
第18図 第22・23号住居址……………45	第42図 第1号住居址出土土器(2)……………96
第19図 第24号住居址……………47	第43図 第14号住居址出土土器(1)……………97
第20図 第9号住居址……………49	第44図 第14号住居址出土土器(2)……………98
第21図 第10号住居址……………50	第45図 第5号住居址出土土器……………99
第22図 第15号住居址, 土壇1……………51	第46図 第7号住居址出土土器……………100
第23図 第16・20号住居址, 土壇2……………53	第47図 第8号住居址出土土器……………101
第24図 第25号住居址……………54	第48図 建物址3・4出土土器……………102
	第49図 その他の遺物, 土製品, 銭……………103
	第50図 青銅製品……………104
図 版……………107	

第1章 調査経過

第1節 調査に至るまでの経緯と文書記録

昭和57年8月3日埋蔵文化財保護協議を実施。出席者県文化課郷道指導主事、中信土地改良事務所清水係長、岩崎、岩淵主事。市耕地課横内主査、市教委神沢。市教育委員会室で説明のあと現地へ行く。島立地区の他島内、寿、神林地区も協議する。

昭和58年1月8日 昭和58年度文化財関係補助事業計画書（提出）

9月20日 昭和58年度文化財関係国庫補助事業の内定（通知）

9月30日 昭和58年度文化財関係国庫補助事業補助金交付申請書（提出）

10月7日 昭和58年度県営ほ場整備事業島立地区南栗及び新村島立条里遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。その概要は現場における発掘調査は12月10日までに完了するものとする。業務に要する費用として中信土地改良事務所は3,482,500円を市に支払うことで、発掘調査計画書には発掘調査の目的及び概要で、開発事業県営ほ場整備事業に先立ち700㎡以上を発掘調査し記録保存をはかる。調査報告書は昭和59年3月31日までに刊行するものとする。作業工程欄では発掘作業18日、整理作業18日、合計36日、発掘調査委託費は全額で4,500,000円、うち文化財農家負担軽減額が1,017,500円である。

10月20日 埋蔵文化財発掘調査通知（提出）

12月1日 昭和58年度国宝重要文化財等保存整備費の交付決定について（通知）

12月2日 昭和58年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書（提出）

12月3日 昭和58年度文化財保護事業県費補助金の内示について（通知）

12月9日 現場作業が残っているため中信土地改良事務所、地元改良区と協議して16日まで延す。

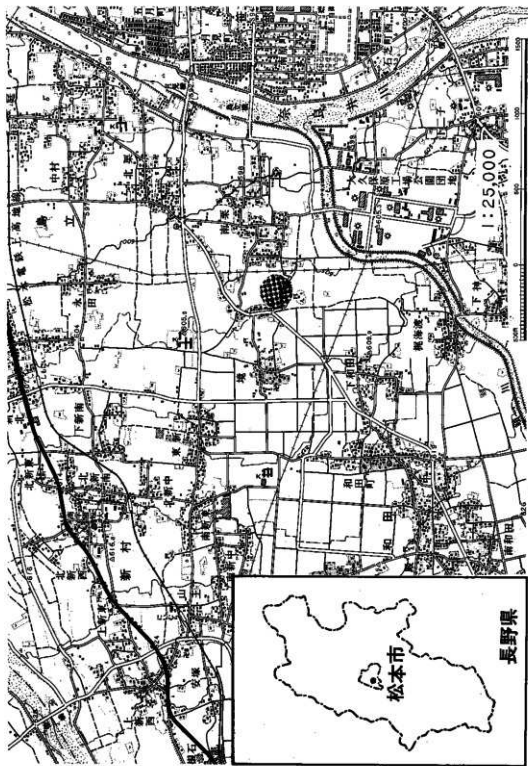
12月13日 昭和58年度文化財保護事業県費補助金の交付決定について（通知）

12月21日 昭和58年度県営ほ場整備事業に伴う松本市木下前田遺跡他3遺跡の発掘調査費の変更について（提出）

昭和59年1月7日、昭和58年度県営ほ場整備事業に伴う松本市木下前田遺跡他3遺跡の発掘調査費の変更について（通知）

1月26日 昭和58年度文化財関係国庫補助事業状況報告書の提出について

2月10日 昭和58年度国庫補助事業に係わる報告書刊行状況について（報告）



第1図 遺跡の位置

第2節 調査体制

団 長	中 島 俊 彦 (松本市教育長)
担 当 者	神 沢 昌二郎 (日本考古学協会員, 市教育委員会)
調 査 員	西 沢 寿 晃 (" , 信大医学部)
	三 村 隆 (長野県考古学会員, 会社員)
	横 田 作 重 (" , ")
	平 林 彰 (")
	森 義 直 (" 大町高校教諭)
	太 田 守 夫
調査員補助	瀬 川 長 広 (あがた考古会)
	三 沢 元太郎 (")
	吉 沢 西 己 (")
	大 出 六 郎 (")
	伊 那 史 彦 (愛知学院大学生)
	山 下 泰 永 (立正大学生)
	山 田 真 一 (早稲田大学生)
事 務 局	田 堂 明 (社会教育課長)
	神 沢 昌二郎 (" 文化係長)
	百 瀬 清 (" " 主事)
	熊 谷 康 治 (" ")
	直 井 雅 尚 (" " 事務員)
	高 桑 俊 雄 (" " 嘱託)
協 力 者	井口喜六, 大久保雅夫, 中島要, 忠地美智子, 大久保安子, 上條彦郎, 佐々木謙司, 坂下しげる, 吉江和美, 田口吉重, 中島新嗣, 藤森寿美子, 鶴川登, 百瀬正道, 堀内いくみ, 吉沢群治, 宮下みこと, 遠藤貞子, 大塚寿美江, 三宅睦子, 小岩井勝, 三村竜一, 浅井釣次, 青山春敏, 清水真理, 吉沢紀洋子, 藤森久子, 百瀬正道, 鈴木なつえ, 柴井志げの, 倉科由加理, 吉田浩明, 小穴喜一, 小穴芳実, 柴田尚子, 高桑弘子

第3節 作業日誌

昭和58年11月1日（火） 1～10地点、バックホーにより坪掘りを行う。

市教委：高桑俊雄

11月2日（水） 晴 昨日に続き坪掘り作業を11～16地点にて継続。11地点より2軒、12地点より2軒、14地点より1軒、計5軒の住居址確認、15地点に落込みが見られる。

市教委：高桑

11月3日（木） 曇 現場打ち合わせ。

作業員：高桑他2名

11月4日（金） 曇 本日より本作業に入る。第1、2号住居址掘り込みをする。11地点はバックホーにより拡張作業。住居址6軒、溝、建物址等を検出。

調査員・調査補助員：山田真一 作業員：井口喜六他9名 市教委：高桑

11月5日（土） 曇 第3、4、5号住居址を検出し掘り込む。第5号住居址より銭出土。第17、18地点を、バックホーにより坪掘り。

調査員・調査補助員：三村肇、森義直、山田 作業員：井口他14名 市教委：高桑

11月7日（月） 晴一時雨 第4、5号住居址掘り込み継続。第9号住居址を掘り下げる。溝1を検出。17地点にて、住居址及び建物址等の検出作業を行なう。条里遺構確認の為、東西トレンチI、II、南北トレンチIを設定。東西トレンチIからトレンチ掘り作業を開始する。

調査員・調査補助員：三村、山田 作業員：井口他15名 市教委：高桑

11月8日（火） 東西トレンチII、南北トレンチIをバックホーにより掘り進む。17地点の検出作業。第6号住居址の掘り下げ開始。

調査員・調査補助員：横田作重 作業員：井口他15名 市教委：高桑

11月9日（水） 晴 第6、7、8号住居址掘り込み。

作業員：井口他14名 市教委：高桑

11月10日（木） 曇のち小雨 溝1の土層図作成。第6、7、8号住居址の掘り込み継続。第8号住居址より、青銅鏡を出土。第10号住居址写真撮影。

調査員・調査補助員：瀬川長広、大出六郎、三沢元太郎 作業員：浅井釣次他17名 市教委：高桑

11月11日（金） 晴 第8号住居址の土層図を作成。第9号住居址のビットを除き、床面迄検出第10号住居址の測量。土壇11、13を検出し、掘り下げる。第14号住居址、第15号住居址を検出し、掘り下げる。

調査員・調査補助員：瀬川、三沢 作業員：青山春敏他14名 市教委：高桑

11月12日（土）曇のち雨 第6、8号住居址の土層図を作成。建物址1、2を検出し、掘り込みをする。第9号住居址柱穴の検出。土壇13及び第15号住居址の掘り込みをする。

調査員・調査補助員：三沢 作業員：青山他14名 市教委：高桑

11月14日（月）霧深しのち晴 第6号住居址の土層図を作成。第8号住居址のベルト外し。第9号住居址の柱穴掘りの継続。第15号住居址の床面を検出。同土層図を作成する。第16号住居址を検出し、掘り下げる。溝1に再びトレンチを入れる。

調査員・調査補助員：瀬川、大出、三沢 作業員：井口他12名 市教委：高桑

11月15日（火）濃霧のち晴 第6号住居址のベルトを外す。第7号住居址掘り込み。断面図を作成。第8号住居址のベルトを外す。鉄製紡錘車出土。土壇12を検出し掘り下げる。第19号住居址検出し、青銅器出土す。第15号住居址のベルトを外し、第16号住居址の床面を検出する。

調査員・調査補助員：瀬川、大出、三沢 作業員：井口他11名 市教委：高桑

11月16日（水）第6号住居址の床面を検出。南北トレンチⅠに礫層を確認する。

作業員：藤森寿美子他15名 市教委：高桑

11月17日（木）曇のち雨 第17号住居址掘り込み。第20号住居址を検出し掘り下げる。南北トレンチⅠの礫層を再度確認する。後、雨のため、土器洗いを行う。

作業員：田口吉重他13名 市教委：高桑

11月18日（金）小雨のち晴（風強し）第6号住居址の遺物をとりあげ、柱穴1～4を掘り始める。第8号住居址遺物出土図を作成、遺物をとりあげ、床面を検出する。第7号住居址の床面検出。第9号住居址の柱穴が掘りあがる。第20号住居址の掘り込みをする。

作業員：藤森他11名 市教委：高桑

11月19日（土）濃霧のち晴 第7号住居址の遺物出土図を作成し、床面まで検出する。第8号住居址の柱穴を検出し、掘る。第8号住居址の遺物区及び遺構図を作成する。第14号住居址の土層図を作成する。第17号住居址を検出し掘り下げる。溝1の土層図を作成する。南北トレンチⅠの礫を追う。冷え込みがきびしくなる。

作業員：田口他16名 市教委：高桑

11月21日（月）濃霧のち晴 第7号住居址の床面を検出する。第15号住居址の測量を行い、遺物をとりあげ、写真撮影。第16号住居址の柱穴を掘る。第17号住居址を検出し、掘り下げる。第14号住居址のベルトを外し、床面を検出する。土壇1を検出し、掘り下げる。

調査員・調査補助員：伊那史彦 作業員：田口吉重他13名 市教委：高桑

11月22日（火）曇のち晴 第6号住居址の柱穴を掘り込み、土層図を作成する。第7号住居址の床面を検出。鎌が出土する。第9、10号住居址掘り終わり、写真撮影をする。

調査員・調査補助員：大久保知巳 作業員：田口他12名 市教委：高桑

11月24日（木）雨のち晴 雨のため発掘作業は中止。土坑11, 第14号住居址を実測する。

調査員・調査補助員：大久保, 横田 作業員：堀内いくみ他1名 市教委：高桑

11月25日（金）小雨のち曇 土坑11, 12, 13の土層図を作成し, 12, 13については, 平面測量をする。第17号住居址では, 周溝を検出する。第18号住居址を検出し, 掘り下げる。第20号住居址の掘り込みをする。建物址2の土層図を作成。

調査員・調査補助員：大久保 作業員：田口他7名 市教委：高桑

11月26日（土）曇のち雪 第1号, 2号住居址を測量し, 第18号住居址を掘る。

作業員：堀内他11名 市教委：高桑

11月28日（月）晴 第7号, 8号住居址を掘り終わり, 写真撮影をする。第14号住居址の遺物をとり上げる。第17号住居址の周溝を掘り, 第18号住居址の床面を検出。建物址1, 2を掘り終わり建物址4を検出する。第21号住居址を検出し, 掘り下げる。

調査員・調査補助員：太田守夫 作業員：田口他12名 市教委：高桑

11月29日（火）晴 第1号及び2号住居址につき, レベル読み, 遺物のとりあげをする。第3号住居址の土層図を作成。第22号, 23号住居址及び溝3を検出し, 掘り下げる。第17号住居址の土層図を作成し, 第24号住居址の検出作業及び掘り込みをする。

作業員：田口他13名 市教委：高桑

11月30日（水）雨のち曇 第22号, 23号住居址の掘り込みをする。第22号住居址よりカマド出現建物址3を検出し, 掘り下げる。

作業員：田口他11名 市教委：高桑

12月1日（木）晴 第3号住居址の平面図を作成。第4号住居址のベルトを外し, 柱穴を掘る。第17号及び18号住居址のベルトを外し, 第24号住居址の掘り込みをする。建物址3, 4の掘り込み継続。土層図を作成。

作業員：田口他13名 市教委：高桑

12月2日（金）建物址4の掘り込みをする。

作業員：田口他13名 市教委：高桑

12月3日（土）曇 建物址4及び第24号住居址を掘る。

作業員：田口他14名 市教委：高桑

12月4日（日）晴 土器洗いを行う。

作業員：柴田尚子 市教委：高桑

12月5日（月）晴 第17号住居址の遺物出土状態を測図する。

作業員：堀内他1名 市教委：高桑

12月6日(火)晴 第21号住居址の遺物出土状態を測図し、写真撮影をする。第23号及び24号住居址のベルトを外し、建物址3を掘る。

作業員：堀内他5名 市教委：高桑

12月7日(水)晴 第4号住居址の柱穴を掘り、土層図を作成する。遺構図を作成する。第5号及び21号住居址の発掘完了。写真撮影をする。第17号住居址の柱穴を掘る。建物址3、4を掘り込む。全体測量を開始する。

作業員：清水真理他7名 市教委：高桑

12月8日(木)晴 第20号住居址の床面を検出。第22号及び23号住居址の遺物及び遺構図を作成。溝3の断面図を作成する。第24号住居址の床面を検出し、建物址4を掘る。

作業員：清水他5名 市教委：高桑

12月9日(金)晴 第1号及び2号住居址を精査し、柱穴を検出、掘り下げる。カマド断面図を作成。第20号、24号、25号住居址の床面を検出。東西トレンチⅠ、南北トレンチⅠの土層図を作成する。作業が残っているため、中信土改、地元改良区と協議して16日まで延長とする。

作業員：清水他7名 市教委：高桑

12月10日(土)晴 第1号、2号の柱穴掘り、遺構図完了、写真撮影をする。第24号住居址の床面検出作業。第25号住居址遺構図及び土層図を作成し、写真撮影をする。

作業員：清水他6名 市教委：高桑

12月11日(日)雨のち曇 建物址1、2の平面図を作成。第7号、8号住居址の遺構図を作成する。東西トレンチⅡの土層図を作成する。

作業員：清水他2名 市教委：高桑

12月12日(月)晴 東西トレンチⅡ、南北トレンチⅠの土層図を作成。第16号、20号住居址の平面図を作成。建物址4を掘り下げる。全体測量をする。

作業員：清水他3名 市教委：高桑

12月13日(火)小雨 第6号住居址の柱穴を実測し、写真撮影をする。第7号住居址の柱穴を検出し、掘り込む。第7号、14号住居址のレベルをおとし、第16号、20号住居址の掘り込みを終了し、写真撮影をする。建物址1、2の写真撮影を行い、建物址3の平面図を作成する。溝1の $\frac{1}{100}$ の平面図を作成する。

作業員：清水他5名 市教委：高桑

12月14日(水)晴 第6号住居址カマド土層断面を実測し、第17号住居址の柱穴を検出、土層図を作成する。第18号、22号、23号住居址の写真撮影。建物址3、4につき平面図を作成。第24号住居址、墓址1、2、3、集石1の平面図、断面図作成。

作業員：清水他8名 市教委：高桑

12月15日（木）曇 第4号，6号，18号住居址のカマド断面図作成。建物址3，4を掘り終わりレベル読みをし，写真撮影をする。第17号住居址のピット及び貼床下遺構を掘る。第22号住居址のカマド断面図を作成。

作業員：清水他7名 市教委：高桑

12月16日（金）曇 第6号住居址の貼床下遺構を検出。佐波理鈍出土す。第17号住居址のカマド断面図を作成し，レベル読みをする。第23号住居址にて，貼床下遺構検出。第24号住居址の床面検出。墓址1，2，3，集石1を掘り終わる。溝4の断面図を作成。本日をもって現場発掘作業終了。

作業員：清水他5名 市教委：高桑

12月17日（土）晴 現場の残務整理

作業員：清水他3名 市教委：高桑

12月20日（火）晴 テントを撤収し，後片づけ作業終了。

作業員：清水他1名 市教委：高桑

59年1月以降整理作業継続中

（事務局）

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

この地域は、波田町から上新、東新を経て島立に開いている梓川の扇状地と、鉢盛山東側に源を発する鎖川扇状地の合流扇状地の末端で、梓川と鎖川の堆積の接触面と考えられる。梓川の沖積層は、和田村衣外附近から島立地区南栗に至る線で、鎖川の沖積地に連絡しているものと考えられており、遺跡の海拔は605 m(土)、傾斜は、 $N75^{\circ}-E-W$ である。

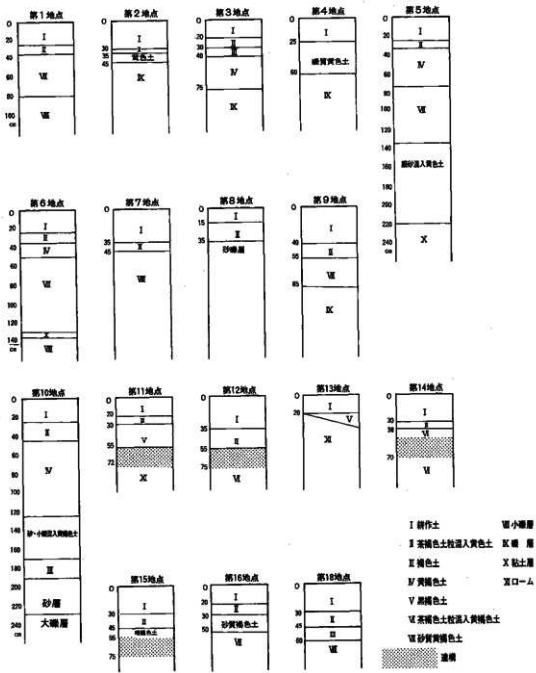
遺跡及びその周辺の土層は、深いところで2 mをこえる厚い堆積で、扇状地末端の沖積地の特性をよく表わしている。土壌は、水田に利用されて有数な米作地帯となっているだけあって、壤土であり、酸化鉄の集積も多く、典型的な褐色を示している。土層中の岩石は、古生層起源で、砂岩(硬砂岩を含む)、粘板岩、チャート、輝緑ぎょう灰岩、珪岩であり、花崗岩、安山岩は含まれていない。れきの形は、ほぼ円礫で $10 \times 10 \text{ cm}$ をこえることは少ない。礫層からみる堆積方向(流れの方向)は、 $N40^{\circ}-60^{\circ} E$ になっている。

梓川の堆積物は、花崗岩、玢岩に礫を混じえた拱積層砂礫を含んでおり鎖川系統はそれがない。又、堆積方向、地形面の傾斜方向からみて、遺跡及びその周辺は鎖川の影響が強いと考えられる。事実、2 mの下底には汚れていない石の礫層(みどり色の細礫、細石)が見られた。これと上記の礫層のつながりは、まだはっきりとしていないが、鎖川系統の礫と考えている。

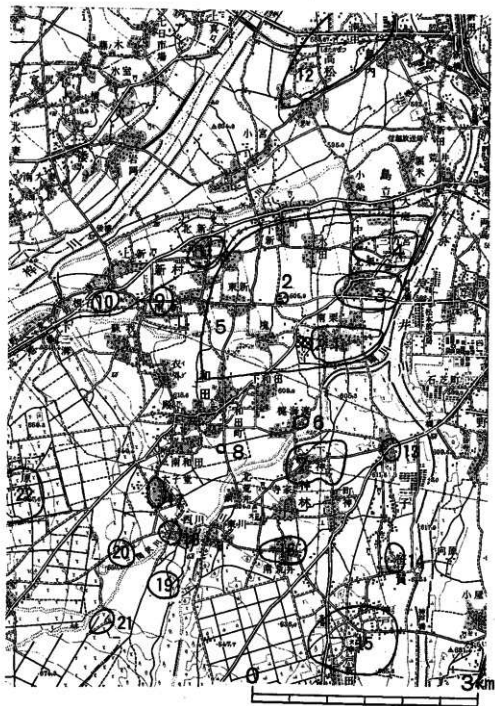
遺跡近くを流れる堀川については、排水路の役目をもっているもので、沿岸地への被害はほとんどない。昭和初期までは、サケ、マス、アユがのぼってきたと聞く。

南東にある大久保(大久保団地周辺)の久保は「窪」で、河川の合流地の意味の凹地である。かつては南栗、大久保、笹部は一つであったが、奈良井川、鎖川の開折により寸断されたという。が歴史的に見て、松本藩でなく、笹部水野領だったことと、何らかの関係があるかも知れない。

発掘により、島立の地形形成、更には、生活の舞台が解明されるだろう。(太田 守夫)



第2图 島立地区各地点土层概念图



- ◎印発掘地点
- 1 南栗遺跡
 - 2 高網中学校遺跡
 - 3 北栗遺跡
 - 4 三ノ宮遺跡
 - 5 新村・島立条里的遺構
 - 6 梶海渡遺跡
 - 7 下神・町神遺跡
 - 8 和田町遺跡
 - 9 秋葉原遺跡
 - 10 安塚古墳群
 - 11 新村遺跡
 - 12 島内遺跡群
 - 13 下二子遺跡
 - 14 くまのかわ遺跡
 - 15 神戸遺跡群
 - 16 南荒井遺跡
 - 17 太子堂遺跡
 - 18 川西遺跡
 - 19 川西開田遺跡
 - 20 三間沢川左岸遺跡
 - 21 境窪遺跡
 - 22 三夜塚遺跡

第3図 周辺遺跡

第2節 周辺遺跡

島立地区は松本市の西方にあり、松本城から5kmあまりで、本遺跡はその島立地区のうち最南部に位置する。島立地区は奈良井川と梓川の合流する河岸段丘の平地で、島状をなしており、中世における小笠原氏の同族が所領した居館を島の館といったことなどが、島立の地名にかかわっている。地区内には野麦、山形、仁科街道、高綱道、牛道、蛇原道、千国道、和田道などの街道があり、安曇、飛騨に通じる要衝の地にあたる。

島立の遺跡については故藤沢宗平氏が詳細に調査しており、それによると大きく見ると奈良井川左岸100mあまりの段丘面と、集落の中とに分けられよう。しかし奈良井川だけが島立の遺跡の立地に影響を及ぼしたのではなく、むしろ西の梓川からの分流による何本もの堰の縁辺に遺物の出土が多い。

まず南側よりみてみると、南栗部落では今回発掘調査した南栗遺跡の一部では、栗林神社の西側で大形の須恵質甕、神社東南方水田から須恵器などが、また乃木殿から土師器環などが出土している。今回発掘調査した中心点あたりでも、戦後小規模の構造改善をした際に、多量の土師器らしいものが出土したときいている。堀川と久保川の枝れる擬宝珠地蔵でも有頸小形壺の出土をきいている。

北へ行って月見橋から高綱中学校脇を通る道筋をみると、奈良井川左岸段丘のハバで採土をした折に縄文中・後期土器片や、土師器、須恵器が出土しており、その西側100mあまりの住宅地からも土師・須恵器が出土している。山形街道と交叉するお乳神社南では地表下32～115cmに土師器・須恵器などが出土している。更に西へ行って高綱中学校ではプール建設時に土師器の出土をみている。次に三ノ宮神社周辺では参道北、農協前、小学校校庭、出張所前などで須恵器を主とした遺物の出土をみている。他に北栗地蔵でも遺物の出土地点が20ヵ所近くも記録されているが、総じて平安時代におけるものである。

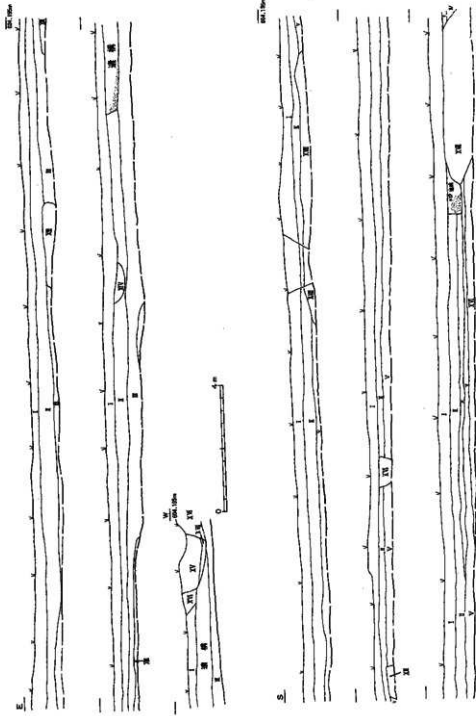
他に三ノ宮以西に広がる水田地帯の東西3km、南北1.5kmにおよぶ範囲が、条里遺構ではないかとみられているが、新村では水田下1.2mあまりに平安時代の住居址があった例もある。現在信濃史学会で調査を続けているのでその結果を待ちたい。

さて近隣地区に目をむけてみると、南側神林縄海渡では平安時代と思われる遺物の出土があり、天井川になっている鎖川を渡って神林下神に入ると、58年度に発掘調査した下神、町神遺跡では、平安時代を中心とした住居址、建物址などが113軒検出され、特に奈良三彩の小壺の出土をみている。西側は和田、新村地区になるが、点々と土師器、須恵器の出土のある遺跡がある程度で遺跡の分布密度は低い。しかし新村秋葉原、安塚では古墳時代末期の群集墳が検出されており、この地の開発が古いものであることを示している。

北側の島内地区の南中、島高松でも小さな段の上部で土師器・須恵器を出土しており、こも島立と同様に水田下に平安から鎌倉・室町に至る時期の遺跡が眠っていると思われる。奈良井川右岸の笹部征矢野では遺物の出土を聞かず、奈良井川の氾濫原として、また湧水の多い湿地帯として生活には適さなかったのではないかと思われる。この他奈良井川左岸上流の笹賀地区では、牛の川（縄文・古墳・平安）神戸（縄文・平安）、くまのかわ（縄文・奈良・平安）下二子（平安）と比較的低地に遺跡が続き、対する西側では神林の川西（平安？）川西開田（縄文・平安）三間沢川左岸（平安）の各遺跡があり、山形村との境の三間沢川右岸では境窪（弥生・平安）、更に山形村の三夜塚遺跡では縄文中期の集落が知られている。

（神沢昌二郎）

参考文献 「松本市・塩尻市・東筑摩郡誌」第2巻歴史上
「長野県の地名」日本歴史地名大系20、平凡社



第5図 東西トレンチ I, 南北トレンチ I 土層断面図

IX 灰褐色土状混入小砂粒層
 X 埋藏層

- I 耕作土
 II 埋藏層
 III 明褐色土
 IV 砂状褐色土
 V 褐色土層
 VI ローム状黒褐色土状混入褐色土
 VII 暗褐色土
 VIII 黄土、灰化物混入暗褐色土
 IX 黒褐色土、灰褐色土状混入暗褐色土
 X ローム状混入暗褐色土
 XI 小礫状褐色土混入暗褐色土
 XII 灰色土、暗褐色土、明褐色土層の埋藏
 XIII 小礫混入砂粒層
 XIV 黄灰褐色土
 XV 暗灰褐色土
 XVI 明灰褐色土

1:1
 1:10m



東西トレンチII



第6図 南北トレンチI、東西トレンチII土層断面図

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1. 概要

調査地は松本市島立南栗地轄に位置している。ここは用地の中央部を南から北へと中央道長野線が通過を予定している。その東、西側が今回の事業の対象となった所である。

今回の調査は、ほ場整備により、深く削平される地区と、遺跡の範囲、及び、「新村、島立地区条里遺構」の南限確認に主眼を置き、図5、6の如くに坪掘り、トレンチを設定し開始した。そして坪掘りにより、2地区は大きく掘り3地区は必要最低限にとどめている。調査面積は約1,800㎡、試掘面積は約500㎡にわたる。

その結果、住居址は、奈良時代6、それとほぼ同時期のもの1、平安中期2、平安末期6、中世5、時期不詳2、計22軒。建物址は、数回建て直しを行っている奈良時代と思われるもの2、不詳2、他に土壇19、溝5、基址3、集石1等を検出した。土壇は時期や性格を把握し得る程の遺物を出してはならず、溝はいずれも平安末期の土器を含んでおり、溝4は中世まで下る。又、唯1基の集石はその位置から基址であろうと推測する。又、長いトレンチ、試堀等により、住居址、土壇各6以上、他に配石1を確認している。

出土した遺物には、土器として、土師器、須恵器、灰胎・緑釉陶器、中世陶器などが各種、紡錘車や鉄鉢、釘、鎌などの鉄製品、佐波理鋤、六器、水瓶などの青銅製品や銭、他に、砥石、土製紡錘車など多種多様なものが見られ、又遺構にはつながらなかったが縄文時代石器、弥生時代の土器片も得ることができた。縄文中期の遺跡は月見橋西側（奈良井川左岸）にも既に知られているところであるが、唯一点出土した弥生の墓は貴重なものである。

2. 各地点の概要と土層

第1地点 今回のほ場整備用地内南西端にあたり深さ80cmで小礫層となる。遺物は1点も出土しなかった。

第2地点 この周辺は南から北へと階段状に田が連なっている。堤防を隔てて南から東へと須川が流れている。川の影響を受けていたらしく床土も薄く約40cmで礫層となる。この地点は古字で「元塚上」との地名が残るが塚らしきものは周囲に全然見当らなかった。

第3地点 栗林神社南側で第1地点との中間地点である。約80cmで礫層となる点では第1地点

と良く似ている。ただ褐色土層～黄褐色土層にかけて須恵器環、土師器環、カメ等が若干出土したが小片であった。遺構は検出できなかった。

第4地点 第2地点から150m北にあたり現状は畑地となっていた。約60cmで礫層となり、遺物は見られなかった。

第5地点 神社参道から中央道を隔てた東にあたり第10地点と共に特に深掘りした地点である。この地点では礫層は全然みられないが、その代わりに砂質土が80cm下まで140cm堆積し、粘土層となっている。遺物は全然見られなかった。

第6地点 神社南西際である。礫層は見られなく遺物も見当らなかった。

第7地点 神社北側にあたる。戦後小規模な構造改善を行い多量の遺物を出土したと聞いたのはこの地点である。床土の下はすぐ小礫層となる。上部を削平、客土した為にこのような土層状態を呈するのであろう。遺物は全然見当らなかった。

第8地点 現在、擬宝珠から神社北側周辺の水田に水を引いている堰のすぐ東側の地点である。約40cmで砂礫層となった。この中には花鉢、陶器片が入っており後に聞くと横の堰は何度となく流れを変えており、その為の土砂の堆積によるものと判明した。

第9地点 用地内北部、中央道路線際の地点である。約80cmで礫層に変わる。やはり遺物は見当らない。

第10地点 用地北西隅にありすぐ北側を堀川が東に向かって流れている。深掘りした地点である。層序がやや変わっており地表から120cmで小礫、砂が見えその下に褐色土層が入る。そして再び190cmから砂層、礫層となっている。つまり褐色土層が礫層にはさまれた状態であった。遺物は全く出土しなかった。

第11地点 神社北側、擬宝珠から堰の北中央道際を掘り出した。土層は床土下が黒褐色土、ローム（黄色土）というきれいな順序である。掘り出しの段階で須恵器環、カメ、土師器カメ等に弥生時代のカメ口縁が2点出土した。該期の遺構を期待しこの地点を西、北へと拡張した。遺構は黒褐色土下層から掘り込まれているがローム上層を遺構検出面とした。検出面は南側で約50cmと浅く、北側は約110cmと深くなっていた。遺構には、奈良時代に属する住居址5、建物址2、平安中期の住居址1、中世の住居址2、他に溝2、土壇4等があり弥生時代の遺構は見当らなかった。分布状況から遺構は堰を隔てた南側及び中央道路線内でも検出することが予想されよう。

第12地点 用地内北東隅にあたる。重機を入れた部分が住居址の覆土上であり切り合った2軒を検出したのみで拡張を中断した。遺物には、須恵器カメ、土師器碗、環、カメ、高環等を見る事が出来た。住居址は床土下の黄褐色土中に検出した。2軒とも時期的には平安末に含まれるものであろう。又土壇も3基検出している。

第13地点 12地点の掘り出し中に地元の方からこの北側、堀川に添ってかなり広い部分を壁土用

にロームを採りその際かなりの土器、石等を掘り出したという話を聞きこの地点を設けた。事実この地区は周囲とは約1mの段差をもっていた。土層をみると耕作土下は薄く小礫を乗せたローム（黄色土）で、一部が黒褐色土の状態であり若干の須恵器カメ、土師器環等を得ることが出来た。西側の畔には石組粘土カマドがそのまま残っており中には焼土に混じって須恵器や土師器の環等も入っていた。残存したこのカマドの高さからして耕作面が住居址床面の高さに適当であり、この地区一帯は既に遺構は破壊されてしまっていると考えた。

第14地点 11地点の中央道を隔てた東側、了智上人墓の西側部分に当たる。床土下が黄褐色土であり、遺構はこの土層中に検出できた。検出面は東側で約40cm、西側で約60cmと深くなる。12地点同様最初に重機を入れた場所が住居址覆土中であり、1軒を検出したのみで拡張を中止する。遺物は須恵器環、カメ、土師器環、カメ等がみえる。検出した遺構は、奈良末～平安初期に属すると思われる住居址1、それを切る溝2、墓址3、集石1等である。なおこの地点は後に述べる19地点と共に、古字名「薬師堂」と呼ばれている所である。南側には、「阿弥陀堂」という古字名も残っており、宗教的な色彩を強く感じさせた場所であった。

第15地点 神社裏（東）参道際、中央道路線東側の場所である。床上下が暗褐色土でありそれよりやや黒い黒褐色土が落ちこんでいた。土色の変化以外には遺物もなく住居址の覆土とはやや異なった感じを受ける。

第16地点 やはり以前神社周辺の構造改善の際に大きな須恵器のカメが3点出土し、故藤沢宗平先生が報告している（東筑郡誌上巻）のは神社西側ではなくこの参道西側と地元の方から聞いて設けた地点である。この周囲はかなり削平、客土した部分があるらしい。上面から30cmの所で砂質の土層となり遺構は検出できなかつたが、灰釉坑大片、土師器環などが見え遺物はかなり散布しているようである。

第17地点 土層柱状図には図示していない。この地区は桑園時代にやや東に向いた高い地形であり、水田にする際に上部を削平した。その時に大きな礎石らしきものや、他に直刀のようなものを見た、とその時の理事長などから聞いた為急ぎ設けた地点である。西側を坪掘りすると耕作土下約20cmの床土中に遺物が見え、9、10号住居址などは上部がほとんどばざされていた。この深さからして現場整備では、この辺りが遺構の最も破壊される恐れがあり、できるだけ拡張する事と決めた。東側は耕作面から約40cm～50cmで明褐色土となる。拡張部分中央は一部礫の露出している所や、溝の氾濫によるものなのか白灰色の土がまだら状に入りこみ、かなり遺構検出がむずかしく又時間的な制約により、サブトレンチを2本入れて確認にとどめた遺構もある。

第18地点 了智上人墓の東にあたる。約60cmで小礫層となる。褐色土中より、灰釉質の陶器片1点を得たのみであるが、平安時代のものとはやや趣の異なるものであり中世に含まれるものかも知れない。

3. トレンチ (第5・6図)

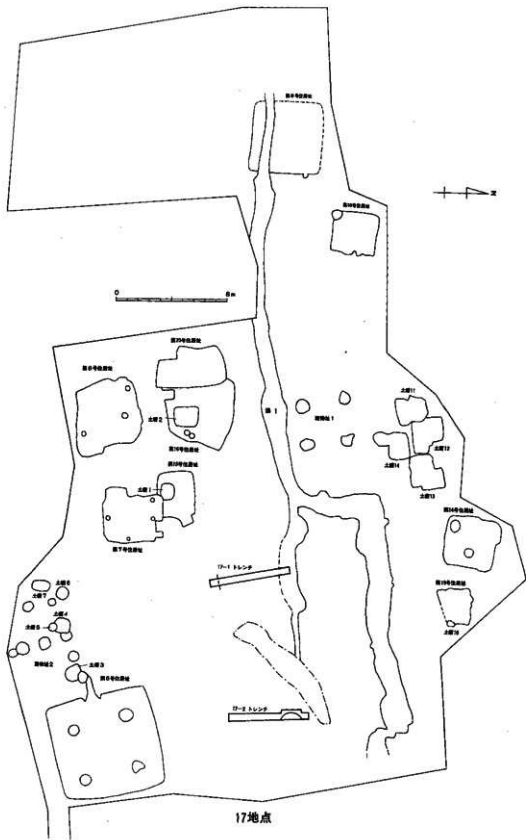
本遺跡の北に隣接して古くから条里遺構の存在が知られている。調査ではこの条里遺構の南限を確認するため3本のトレンチを入れた。南北トレンチⅠは11地点より北へ約150m、東西トレンチⅠは17地点から南北トレンチⅠにかけて約50m、東西トレンチⅡは同Ⅰの東方延長上に位置する14地点から東へ約68mいずれも幅約1.5mをもって走る。尚南北トレンチ北側70mについてはトレンチ内に水が入ったため、観察のみにとどめた。

南北トレンチⅠは第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層溶脱土、第Ⅴ層褐色土を基本に堆積しており、第Ⅱ層と第Ⅴ層との間に一部ローム塊混入黒褐色土(第Ⅹ層)が挟まれている。東西トレンチⅠでは第Ⅴ層を欠き第Ⅲ層明褐色土が最下部に堆積している。また第Ⅰ層上面で検出された新しい落ち込みには暗灰褐色土(第Ⅳ層)および茶褐色土粒混入砂利が堆積していた。東西トレンチⅡも基本土層は同Ⅰトレンチと変わらないが、一部最下層に褐色土(第Ⅴ層)がみられる。南北トレンチⅠ・東西トレンチⅠはそれぞれ南西から北東へ向けて走る礫層(第ⅩⅢ層)によって寸断されている。これらはほとんど最下層(第Ⅲ層または第Ⅴ層)上面で確認され比較的薄い堆積をみせるものの、南北トレンチⅠ北寄りの礫層は規模が大きく、同方向に長さ20m幅5mをもって第Ⅱ層以下を切り約1m堆積している。礫はすべて流水作用によって形成された自然礫である。太田守夫氏によると、鎖川の流路が一定していなかった当時本遺跡内にもその氾濫が及んでおり、この礫層がその証左となる。尚、南北トレンチ北礫層下部からは突帯を有する四耳壺が出土している点から、礫層は中世以前に形成されたと考えられる。

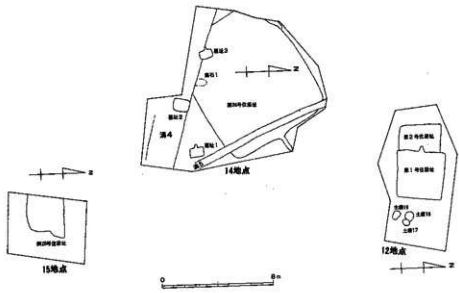
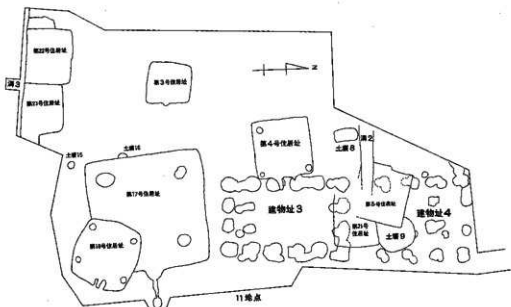
3本のトレンチ内には5軒の住居址と5ヵ所の遺構らしき落ち込みがみられる。いずれも第Ⅱ層上面または最下層上面で確認され、特に住居址の場合覆土下部床面付近で焼土を検出している。前述した南北トレンチ内の礫層は住居址をも破壊しており、ために住居廃絶時は礫層形成時をさらに遡る。東西トレンチⅡ中央やや西寄りの第Ⅲ層中で約2.3m幅の礫群が横断していた。これらの礫は人為的に並べられており配石遺構として捉えられる。

遺物は東西トレンチⅠ内東寄り住居址カマド付近より土師環・小形甕・甕・須恵甕が比較的纏って出土したほか、各トレンチから土師環・小形甕・甕・高環・須恵甕・四耳壺が出土している。

(高桑俊雄)



第7図 遺構配置図(1)



第8图 遺構配置图(2)

第2節 遺 構

1. 住居址

第6号住居址 (第9・35~37・50図)

17地点の東南隅に位置し、煙道の一部が建物址2の柱穴によって切られている。本址は東壁がわずかに張った約7.3×7.5mの方形プランをもち主軸はN102°Wを示す。遺構検出面は暗褐色土ないし黄褐色土で四方の壁も同色土であった。床面からはほぼ直に立ちあがっており東、北壁には焼土と炭化したワラ材と思われるものが多量に見られた。覆土はローム混入の暗褐色土が主である。住居址の中央部では、この層の上に青灰褐色土層が堆積している。この土層は、大礫とかなり新しい時期の遺物を含んでおり、一部は下層の暗褐色土層や床面をきっている。この層と暗褐色土層の境界はプランでみると入りくんだ形をしており、単純な自然堆積とは性格を異にしている。床面は軟弱で、主柱穴は4箇所検出された。それぞれ、P₁(82×78×73cm)、P₂(76×72×78cm)、P₃(102×90×83cm)、P₄(86×80×79cm)をはかる。このうち、P₁、P₃の埋土である暗褐色土層の上面には炭が検出されている。また、この床はP₄の周辺を除いて、床の凸凹をならすための厚さ約5cmの貼り床がみられる。貼り床の下からは、主柱穴以外のピットが検出されている。また、東壁北側付近の貼り床下からは佐波理鋤が出土している。粘土製のカマドは西壁中央に設けられ、煙道が約160cm西へ伸びている。また、カマドの前には焼土が多量に検出されている。

遺物は前述の如く多種に亘っている。まず覆土上層からは完形もしくはそれに近い6点の土師器、環、碗、灰釉の碗、皿などが多出した。いずれも青灰褐色の土層中にとどまっている。本址に関わる遺物としては須恵器類が多くなる。環、高坏、甗、坏蓋等で他にも土師器、坏、甕等が青灰褐色に浸されていない土層、あるいは壁際床面上より得られた。またP₄西方には鉄製品の鋸が1点折れた状態で、P₄北側には天然のベンガラ(赤鉄鉱風化堆積物)⁽¹⁾が床面上に径50cmの範囲にわたって見られた。貼床下から出土した佐波理鋤は直径25cm、深さ15cm程のピット中に正位に埋められていた。本址は遺物から見ると奈良時代に属するものと見る。又、上面から得られた遺物に関わる遺構は確認することはできなかった。

(関沢 聡)

(1) ベンガラの判定は森義直氏の分析結果による。

第17号住居址 (第10・38・39図)

本址は11地点南東隅にある。西壁中央よりやや南側で土坑16を切り、南西隅を18号住居址に切られている。プランは東西約8.3m、南北約7.6～8.4mで東壁がやや短い不整形を呈す大形の住居址で主軸方向はN88°Eを示す。黄褐色土中に掘り込まれており、壁高は東壁・南壁が約30cm、西壁約50cm、北壁約40cmを測る。壁の直下、あるいはやや内側に巾約24cm、深さ約20cmの周溝が全周して見られる。床面は黄色粘質土の堅緻な貼り床で全般的に平坦で良好である。P₁～P₁₆までの計16本のピットが検出され、このうちP₁、P₂、P₃は主柱穴であり、40～60cm掘り込んである。P₂、P₃は重複した様子が窺えることから建て直しをした可能性が考えられる。また貼り床の下からはP₁₇～P₁₉、P₂₀の計4本のピットが検出され多量の遺物が出土した。これらのピットは住居址のカマド側に集中して認められる。カマドは東壁中央に掘り込まれて構築され煙道は長く焼土が筒状になっている。先端には土師器の甕が底部を欠いて逆位に据えられていた。またカマド前部は浅く掘り込まれ焼土が多量に散布している。焼土は北東のピットが集中しているところでも多量に散布が認められている。

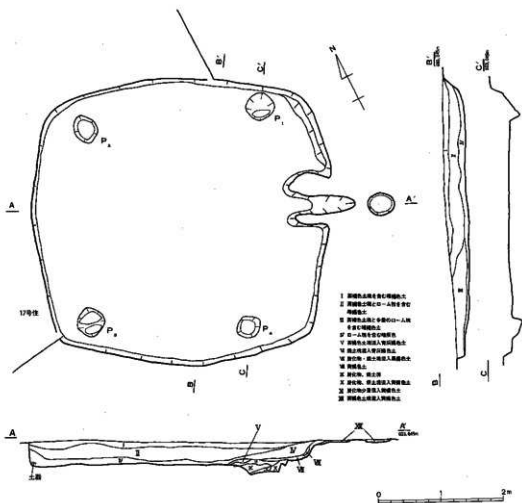
遺物は覆土の上層から中層にかけてと、貼り床下のピットから多量に出土しているが床面付近の出土は少なかった。土器は供膳形態では底部に回転糸切り痕を持たない須恵器の坏が多く、全面を磨いて内面を黒色処理した土師器も見られる。他には土師器の甕等がある。西壁南側中位より、完形の鉄鎌が出土した。なおP₁₆付近には灰色土がシミ状にひろがりその下に水の影響による堆積の茶褐色をした鉄分沈澱層が認められる。水の影響による埋没後18号住居址が床を貼ったと考える。床面差は18号住居址が5～6cm上にある。本址は、供膳形態において須恵器の坏が多いという組成や、回転糸切り痕を持たない須恵器の坏が多いことから、本遺跡の中でも古い時期、奈良時代の遺構と考えられる。

第18号住居址 (第11・40・49図)

本址は、11地点南東隅にあり17号住居址を切っている。プランは各壁の中央部が最も張り出しており長軸約4.0～4.8m、短軸約3.8～4.5mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN115°Eを示す。黄褐色土中に掘り込まれ残存壁高は35cm程であるが南側が約15cmと浅くなっている。壁はなだらかで特に北側で顕著である。床面は黄褐色粘質土の堅緻な貼り床でありP₁～P₄の主柱穴が認められた。P₁(45×46×15cm)、P₂(37×46×18cm)、P₃(45×47×20cm)、P₄(35×42×18cm)であり、浅いが四隅に整然と設けられている。カマドは東側の壁のほぼ中央にある。袖を設けた粘土カマドでありカマド前の床面には遺物がやや多い。しかし焼土は多くは認められなかった。

遺物は北西側の覆土上層から半分に割れた土製紡錘車の円盤部が出土、西側の壁際からは砥石が出土している。土器は土師器、須恵器であり灰釉陶器は含まれない。概して小破片が多い。また赤橙色の胎土で内面に暗文を持つ特異な土師器が出土している。本址は、出土土器から平安中期頃に位置づけられるものと思われる。

(山田 真一)



第11图 第18号住居址

第1号住居址（第12・41・42図）

本址は、用地内北東隅の第12地点に検出された。西側に2号住居址を切っており、その部分にカマドを設けている。相互の床面差は約10cmである。規模は一辺3.4mではほぼ正方形プランを呈する。主軸はN86°Wの方向を示す。壁の状態は良好で、壁高は東・南・北壁とも約30cm程あり床面迄急に落ち込む。床面は黄褐色土で部分的に固い。カマド前も良好にたたきしめられているが周囲よりも5～10cm程度低くなっている。ピットはカマドの左右に2本ずつ検出され、規模は、P₁(55×50cm)、P₂(50×40cm)、P₃(60×60cm)、P₄(60×50cm)で各々床面から10×15cmと浅い。P₁には石2個が入り込み、P₃・P₄には周辺の床面上に焼土塊が広がり、このピット内に落ち込んでいた。カマドは西壁中央部に検出された壁掘り込みカマドであり、焼土も多くはないが見られた。

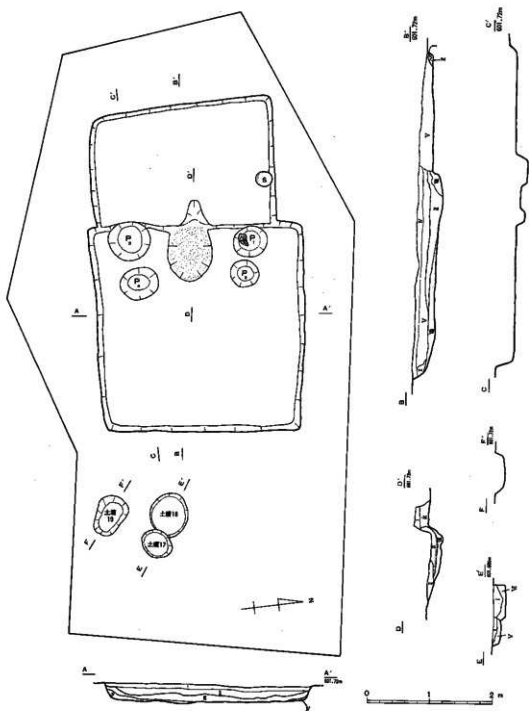
出土遺物は比較的多く、住居址北半分、中でもカマドの北側付近に集中しており、検出面から床面に亘って一様に見られた。尚土器には、須恵器環、小形壺、土師器環、甕、灰釉碗等があり、黒色土器はほとんど認められなかった。遺物からすると本址の所属時期は平安末頃であろう。

第2号住居址（第12図）

1号住居址に東側半分を切られている。平面プランは南北で約3.0mを測り、1号住居址より小形の方形を呈するものと思われる。残存壁高は10cm～12cm程でありあまり高くはない。壁は黄褐色を呈する。床面も同色であり1号住居址のカマド周辺付近ではたたきが行われその部分は良好な状態である。傾斜はほとんどなく実に平坦になっている。尚ピットなどは住居址内外に検出できなかった。カマドはおそらく東壁部分にあったと思われるが1号住居址によって切られており不明である。また1号住居址が深い為その痕跡すらも見る事が出来ない。又床面上北壁際に直径20cmの丸い平石が置かれていた。

出土遺物は約10点と少ない。土器は内黒釉を主体とし、他に須恵器片がみられる程度である。灰釉陶器はほとんど認められなかった。この遺物の少なさは、カマド側を1号住居址に切られただけではないように思われる。尚本址の時期は遺物からして1号住居址同様、平安末に含まれるものと考えられる。

（三村 電一）



- 1 土壇
- 2 土壇
- 3 土壇
- 4 土壇
- 5 土壇
- 6 土壇
- 7 土壇
- 8 土壇
- 9 土壇
- 10 土壇
- 11 土壇
- 12 土壇
- 13 土壇
- 14 土壇
- 15 土壇
- 16 土壇
- 17 土壇
- 18 土壇
- 19 土壇
- 20 土壇
- 21 土壇
- 22 土壇
- 23 土壇
- 24 土壇
- 25 土壇
- 26 土壇
- 27 土壇
- 28 土壇
- 29 土壇
- 30 土壇
- 31 土壇
- 32 土壇
- 33 土壇
- 34 土壇
- 35 土壇
- 36 土壇
- 37 土壇
- 38 土壇
- 39 土壇
- 40 土壇
- 41 土壇
- 42 土壇
- 43 土壇
- 44 土壇
- 45 土壇
- 46 土壇
- 47 土壇
- 48 土壇
- 49 土壇
- 50 土壇

第12图 第1、2号住居址 土坛17~19

第14号住居址 (第13・43・44図)

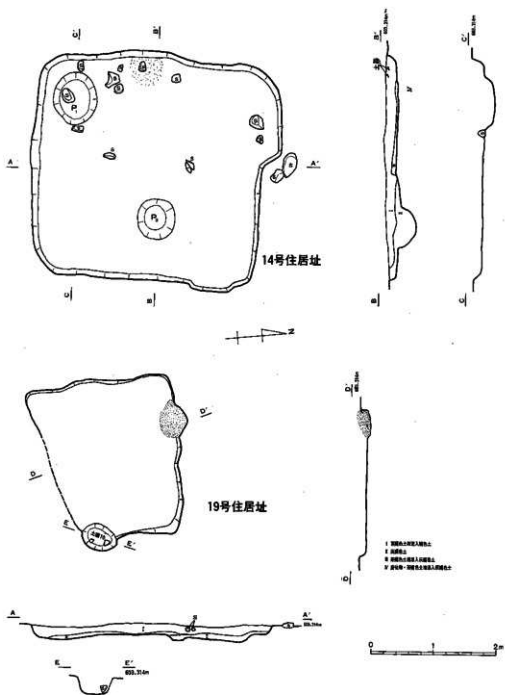
17地点最北部に位置する。本址検出時においてすでに多量の土師器片が出土しており、覆土中には炭化物の混在がみられた。4.0×3.6mの隅丸方形プランを呈し、主軸はN85°Wをさす。壁は褐色土で垂直に立上がる。北側で壁高15cmを測る。床面は直上に薄く炭化物が堆積しているがそれ以下は比較的軟弱である。ピットは2本検出されたが、いずれも柱穴とは認めがたい。西壁中央部床面上に焼土があり、この付近にカマドが設置されたものとする。南西隅のP₁(70×85×35cm)からは土師器片が比較的少量に出土しているが、P₂からは皆無であった。両者の性格は不明である。

遺物は土師環・内黒碗・小形甕・甕・砥石・鉄くぎ等が西壁焼土北側付近より纏って出土したほか、南西部隅に据えられていた平石の下より土師環・須恵環・罎蓋・骨片が出土している。遺物よりみて本址は平安末期のものであろう。(平林 彰)

第19号住居址 (第13・50図)

17地点北東部にあり14号住居址の西側に当る。土城10が南東隅上にあり本址を切っている。南壁の東半分は不明瞭であった。平面プランは東西で2.5mを測り、小形の不整形を呈すると思われる。主軸はN50°Wを示す。壁高は北側で14cmと低く直状を呈す。壁は黄褐色を呈し軟弱な状態であり、床面も同色土で状態は悪く、柱穴ピット等は認められなかった。焼土は北壁中央やや西寄りに見られるが、カマドの構造らしきものは見当らない。

出土遺物には土器・青銅製品がある。土器では胴部にへら削り痕を残す土師器甕があり、青銅製品では水瓶の口縁部がある。2点とも床面からわずかに浮いていた。青銅製品は中世の仏器と見たいが土器はかなり時期の上るものとする。今後詳細に検討したい。(三村 竜一)



第13图 第14、19号住居址 土坑10

第5号住居址（第14・45図）

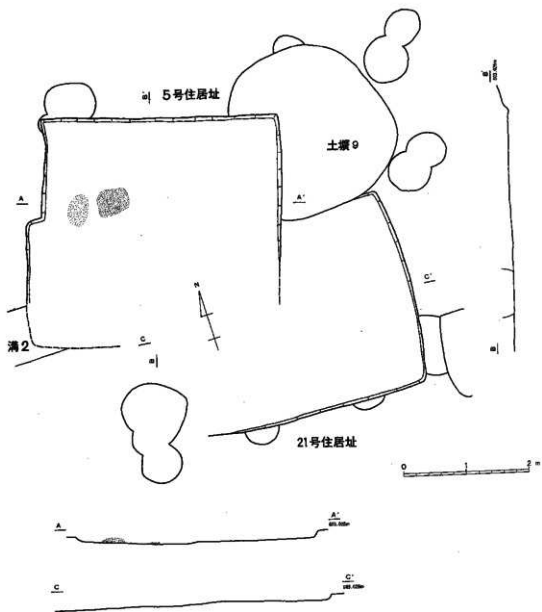
11地点の北寄りにある。溝2が西側から本址南西部上面を切っており、又建物址4の柱穴を本址が切っている。南東側に第21号住居址、又北東隅には土壇9を検出したが、この両者との切り合い関係は不明である。プランは本址の南東部を重機で削平してしまった為、正確には分らないが、東西約3.8m、西壁の南半分に約25cm程の張り出し部を設けた方形を呈するものと思われる。残存壁高は、東・西・南壁とも10cm程度と低いが、比較的垂直に近い状態であった。床面は遺物出土状況と中央周辺に敷物らしき若干の炭化した植物片が見られた為、かろうじて把握したというような状態であり、特定の図などはなかった。ピットは床面下に建物址4があるが、本址のものは検出できなかった。又中央北寄りに焼土を2ヵ所検出した。移動式のカマドの跡であろうか。

出土遺物は比較的少なく、図示したもの以外は小片のみである。本址北東部に多く見られほとんどがほぼ床面上からの物であった。遺物には土器と銭があり土器は土師質土器と銅釜がみられるのみである。銭は開摺通宝と思われ本址北東隅に床面からやや浮き上がった状態で出土した。遺物、出土銭からして本址は中世13世紀以降の時期に属するものである。（三村 肇）

第21号住居址（第14図）

11地点内の北寄りに位置する。建物址3北列の柱穴を本址南部で切り、北の土壇9には切られているものと理解した。又西側に検出した5号住居址との切り合いは不明である。掘り込みが浅く西側床面は検出できなかった。規模は現状でも南北約3.1mを測る。おそらく方形を呈していたものと思われる。残存壁高は東で10cm程と低く褐色を呈し軟弱な状態であった。床面も同色土で非常に軟弱である。ピットは認められず焼土らしきものも見当らなかった。

出土遺物は非常に少ない。土師質土器が主体でほとんどが覆土中からのものである。他に管状の大きな鉄製品(表9・No45)が出土したが、かなり上層からのものであり本址のものとは断定できない。土器から見て5号住居址とほぼ同じ時期に属するものと思われる。（高桑 俊雄）



第14图 第5, 21号住居址

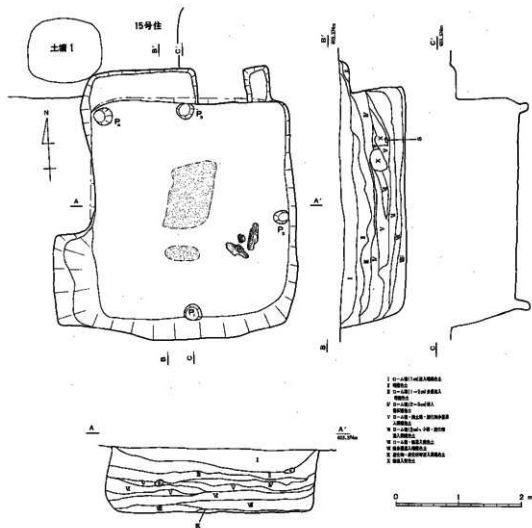
第7号住居址 (第15・46・49・50図)

8号住居址東側にあり、黄褐色土層に掘り込まれている。北側は、15号住居址に上面を切られている。東西3.2(3.9m)、南北3.7(4.1m)の隅丸方形であるが、西南部にゆるやかな斜面の張り出し、北部にも西と東側壁上に張り出し面が設けられている。覆土は上面で暗褐色を呈しかなり明瞭にわかる。土層はかなり細かに分層できた。上層では遺物は少なく小児頭大の石が密に入っていた部分がある。中層～下層になると、中央西寄りに遺物がかなり狭い範囲で堆積している。

東には1～3cm大の小礫がやはり厚く堆積し炭化材片が多く見られるようになる。土層図でみるとローム・焼土塊と炭化物を多量に混入する黒褐色土と、ローム、小礫、炭化物を混じえた黒褐色土が互層をなし床面まで続いている。壁は上面が黄褐色土ないし黄色土で中層に至っては南～東側が1～5cmの礫が露出して急に落ち込む。他の2方は黄色土を呈し袋状となっている。南側を除く3方は床面から検出面まで熱を受け赤変し、非常に固くなっている。床は、面積の約半分が焼土、炭化した材片と多量の穀類等⁽¹⁾により覆われていた。これらの下は礫となり固い床面としては残っていなかった。ピットは4本検出された。床面上の東、南、北壁中央際、及び北西隅に位置している。このうちP₁・P₂は穴が土砂で埋まらず、空間部を残していた。以上の状況から本址は火災に遭い消火の為に多量の土を中へ投げ入れたものと理解する。

遺物は若干の土器と陶器、青銅製品、銭、鉄器が主なものである。常滑製の甕は大片に割れて堆積していたものである。青銅製品は覆土中層から、鎌は北東隅床面上から出土している。又銭は1点の出土であった。出土遺物と銭からして本址は西に隣接する8号住居址とほぼ同時期ないし若干上回る中世の遺構と考えている。 (高桑俊雄)

(1) 材片は榎の樹皮、赤松、ミズメ(梓弓の原木)、桜の樹皮、穀類は全て大麦との即教宗を森義直氏より頂いた。



第15圖 第7号住居址

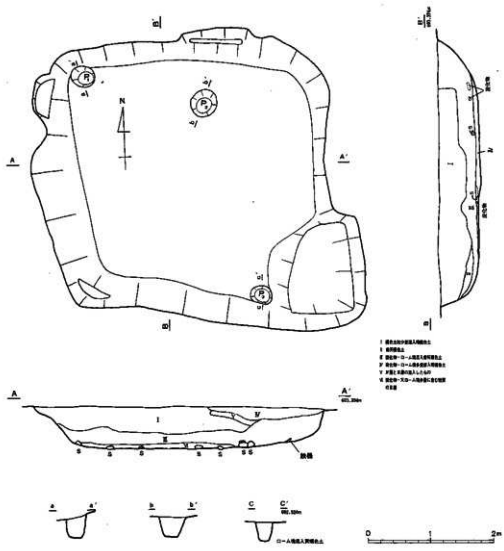
第8号住居址（第16・47・49・50回）

17地点中央南側，第7号住居址の西1.6mに位置する。黄褐色土上層において検出され，覆土は褐色土粒少量混入暗褐色土（第I層），炭化物・ローム塊混入青灰褐色土（第III層），炭化物・大ローム塊多量に含む粘性の青灰褐色土（第VI層）を基本として互層をなしている。平面形は4カ所の張り出し部を有する不整隅九方形で，規模は南北4.8m×東西5.3mを測る。壁は四方ともロームによって構築され，北・西壁は緩やかに東・南壁はほぼ垂直におよそ60cm立ち上がる。北壁中央やや東寄り・西壁北隅付近・南西隅・南東隅の4カ所で階段上の張り出しを検出している。特に南東隅のそれは張り出し面が広く床面に向って緩やかな傾斜がみられたため出入口部ではないかと考えられる。他の3カ所については性格がわからない。床面はロームにより非常に堅く踏み締められており，中央部がやや凹み四方の壁に向ってなだらかに上がる。小礫が床面上に散在していたほかは，焼土痕等はほとんど確認できなかった。ピットは3本検出されている。P₁(40×33，×40cm)・P₂(35×28，×30cm)は柱穴と考えられる。P₃(45×40，×30cm)は住居内の位置に問題は残るがいちおう柱穴としておきたい。P₁₋₃とも埋土はローム塊混入黄褐色土である。

遺物は，覆土第I層から第IV層にかけて6枚の北宋銭が出土している。第III層からは佐波理小鏡，六器とみられる青銅製品が出土している。床面上および第VI層中からは4片に割れた瀬戸灰軸平埴や多量の鉄製品がみられた。このほか須恵器・土師器の小片が若干出土しているが本址の遺物としてはふさわしくない。銭・陶器等より本址の時期は室町中頃(15C)と考えている。(1)

(平林 彰)

(1) 愛知県陶磁資料館学芸員赤羽一郎氏の御教示による。



第16图 第8号住居址

第3号住居址（第17図）

11地点の西寄りにある。規模は南北3.2m、東西2.9mで小形の方形を呈し、主軸はN99°Eを示す。壁高は検出面より15～20cm程と余り深くはない。壁は黄褐色土であり床面までほとんど垂直に落ちている。床も同色土で中央部では非常に固いたたきが見られその部分は良好な状態であるが、周囲は軟弱であり散布する炭化物の薄い層により床面を確認した。傾斜はほとんどないが部分的に起伏が激しい。ピット等は、精査したのであるが検出できなかった。カマドは東壁中央に位置する壁掘り込みカマドであり、左右に袖を設けている。カマドの前には炭化物を含む焼土が床面上に検出された。

出土遺物は少なく覆土中に少量認められるのみであり、床面に至ってはほとんどない。時期的には、本址は北に検出した4号住居址とほぼ同じ奈良時代のものと思われる。

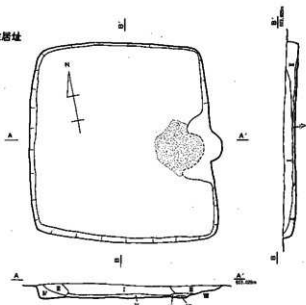
第4号住居址（第17図）

11地点にありカマドの煙道部分が建物址3の柱穴2本を切っている。約4.1mの比較的角の張った正方形プランを呈す。主軸方向はN88°Eを示す。壁高は検出面南で31cm程で床面に垂直に落ちこんでおり壁の状態は固く良好である。床面は全面にたたきが施されており今回検出した住居址のうちで最も固い状態であった。ピットは6本検出された。P₁(46×46×18cm)、P₂(30×28×12cm)、P₃(44×42×18cm)はいずれも円形で4隅に位置する。これが主柱穴と思われるがさほど深くはない。他の円形ピットも同様である。カマドは東壁中央やや南寄りに設けられた壁掘り込みカマドで比較的長い煙道を持つ。手前側には方形のP₄(66×60×36cm)があり、内側に焼土塊がかなり落ち込んでいた。又その北側には壁上部に浅い張り出し部があり、その前の床面上にはかなり広範囲に焼土が散布していた。

遺物は覆土中から若干見られるのみで須恵器環、甕が中心である。時期は奈良時代に属する。

（山下泰永）

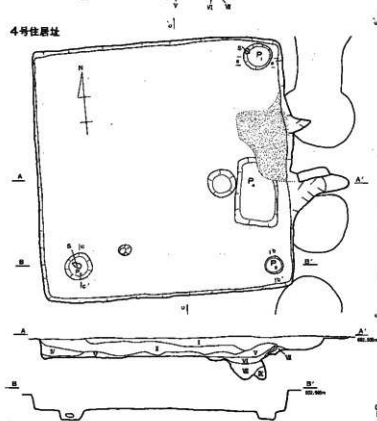
3号住居址



- I ①—A层(1-2)砂质灰土
- II ②—A层(1-2)砂质灰土
- III ③—A层(1-2)砂质灰土
- IV ④—A层(1-2)砂质灰土
- V ⑤—A层(1-2)砂质灰土
- VI ⑥—A层(1-2)砂质灰土
- VII ⑦—A层(1-2)砂质灰土
- VIII ⑧—A层(1-2)砂质灰土
- IX ⑨—A层(1-2)砂质灰土
- X ⑩—A层(1-2)砂质灰土
- XI ⑪—A层(1-2)砂质灰土
- XII ⑫—A层(1-2)砂质灰土
- XIII ⑬—A层(1-2)砂质灰土
- XIV ⑭—A层(1-2)砂质灰土
- XV ⑮—A层(1-2)砂质灰土
- XVI ⑯—A层(1-2)砂质灰土
- XVII ⑰—A层(1-2)砂质灰土
- XVIII ⑱—A层(1-2)砂质灰土
- XIX ⑲—A层(1-2)砂质灰土
- XX ⑳—A层(1-2)砂质灰土

0 1 2m

4号住居址



- I ①—A层(1-2)砂质灰土
- II ②—A层(1-2)砂质灰土
- III ③—A层(1-2)砂质灰土
- IV ④—A层(1-2)砂质灰土
- V ⑤—A层(1-2)砂质灰土
- VI ⑥—A层(1-2)砂质灰土
- VII ⑦—A层(1-2)砂质灰土
- VIII ⑧—A层(1-2)砂质灰土
- IX ⑨—A层(1-2)砂质灰土
- X ⑩—A层(1-2)砂质灰土
- XI ⑪—A层(1-2)砂质灰土
- XII ⑫—A层(1-2)砂质灰土
- XIII ⑬—A层(1-2)砂质灰土
- XIV ⑭—A层(1-2)砂质灰土
- XV ⑮—A层(1-2)砂质灰土
- XVI ⑯—A层(1-2)砂质灰土
- XVII ⑰—A层(1-2)砂质灰土
- XVIII ⑱—A层(1-2)砂质灰土
- XIX ⑲—A层(1-2)砂质灰土
- XX ⑳—A层(1-2)砂质灰土

0 1 2m

第17图 第3, 4号住居址

第22号住居址（第18図）

11地点南西部に位置し、第23号住居址西半を切り南部を溝3によって切られている。黄褐色土層中で検出され覆土はI層黒褐色土II層暗褐色土である。プランは東西3.85mの隅丸方形を呈し、主軸はN82°Wを示す。壁は東側ではかろうじて把握したが、壁高は30cmを測る。床面は掘り方後の敷き締めが弱かったためやや起伏があるとともに、全体的に南へ向かって傾斜している。ピットは2本検出されているが本址に確実に帰属するものかどうか不明である。西壁中央部で6個の柚石によって構築されたカマドを検出する。焚き口にはローム塊・焼土・炭が混在した黒褐色土が堆積しており、比較的短い煙道にも焼土塊混入の暗褐色土が詰っている。焚き口中央部には支脚石が残存していた。規模の大きいP₁は床面直下で検出し、本址建築以前に設けられたものである。

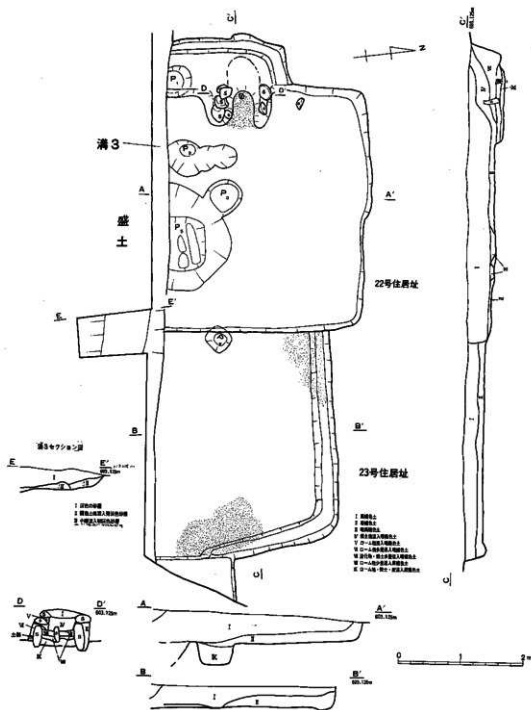
遺物は須恵・土師の坏類中心に出土している。特にカマド付近では土師甕が集中していた。遺物からすると、切り合っている23号住居址とはほぼ同時期のものと考えられる。

第23号住居址（第18図）

11地点南西部に位置している。住居西半は第22号住居址に南半は溝3によってそれぞれ切られている。黄褐色土中で検出され覆土は黒褐色土である。住居の大半が破壊されているが、東西約8.3mの隅丸方形プランを呈すると思われる。主軸はN85°Eをさす。壁は西側および北側において残存良好で約35cmはほぼ垂直に立上がる。壁内側には幅約30cmの浅い周溝が廻る。床は平坦で黄褐色土上に一部貼り床がみられ堅緻な面を残す。ピットは2本検出され、P₁(推定径50cm)・P₂(40×40cm)ともに柱穴と考えたい。北壁中央部および東壁北東隅寄りの床面上で焼土を検出した。本遺跡で検出されたカマドは東壁もしくは西壁に構築されているため、本址の場合も東壁に位置したと考えたい。東側の張り出しは、本址床面より10cm高く黄褐色の軟弱な床面をもっていた。本址と関わりのない別の遺構が存在したと思われるが、その性格は不明である。

遺物は須恵・土師の坏類が出土している。遺物から本址は奈良時代のものであると思われる。

（平林 彰）



第18図 第22、23号住居址

第24号住居址 (第19図)

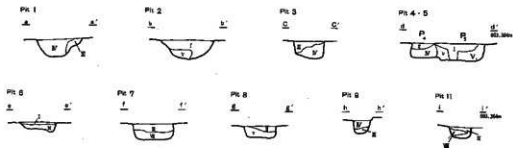
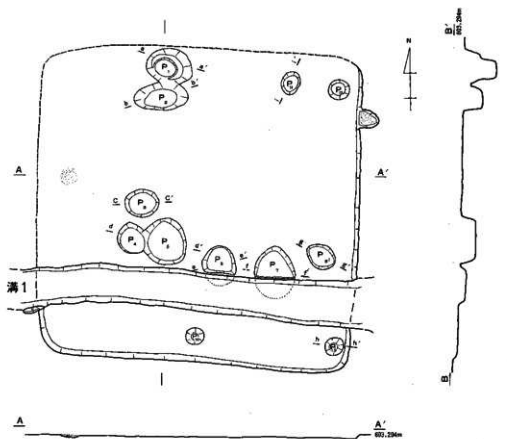
14地点に位置する。黄褐色土上層で検出され、炭化物が混在する暗褐色の覆土上層からは比較的
多量の遺物が出土している。又覆土南部からは集石1・墓址3が検出された。本址は南西部で溝4
東部で溝5に切られており、北西隅は中央道の側道にかかる。8×9mの隅丸方形プランは本遺跡
にあって最大規模を呈し、主軸はN57°Eをさす。壁は北側で締りがよく約15cmほぼ垂直に立ち上
がり南側で約30cmを測る。床面は任意に掘り込んだ後凹部をローム塊でつき固め貼り床を形成して
いるため、比較的良好な所がめだつ。カマドは東壁中央部に掘り込まれ煙道は狭く長い。カマド前
床面上には焼土の集中がみられる。北西部壁に設けられた張り出しは、本址に伴うものであろうがそ
の性格は不明である。なお本址は時間の関係上柱穴検出以上の調査は行わなかった。

遺物は須恵器を中心とし、かなり多い。ほとんどが覆土上層～下層のものであり、遺物より見ると、奈良時代に比定される。

第9号住居址 (第20図)

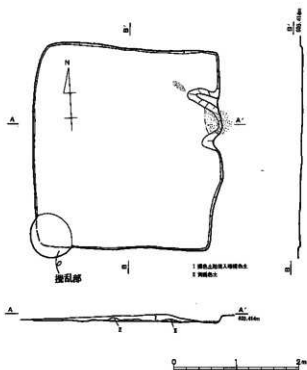
17地点の西隅にある。溝1が本址南側を西から東へ切っている。検出面は水田床土の直下であり、
覆土は非常に浅く、中でも北側では水田耕作が床面まで達していた。約5.0mの隅丸正方形プランを
呈していたと推定され、主軸はN86°Wを示す。壁は北～西部にかけて破壊されているが、東～南
部では約8cmほぼ垂直に立ち上がる。東壁北隅寄りに焼土を伴う小規模な張り出し部がある。床面
は平坦ながら非常に軟弱なため残存状態は極めて悪い。ピットは12本検出された。柱穴はその配置
を考慮した場合P₉(29×29, 22cm) P₁₀(26×30) P₁₁(38×30, 18cm) P₁₂(32×33cm) が該当しよう。
P₁(55×74, 28cm) P₂(45×86, 30cm) P₃(39×50, 18cm) にもその可能性がある。少量の焼土が
西壁寄り中央付近に見られる。おそらく西壁中央にカマドが構築されたものと考えられる。

遺物は須恵器環を主体として土師器環・甕が、P₂、P₃および床面上より出土している。この遺物
からすると本址は平安中期に属する。 (平林 彰)



- 1 地坑底
- 2 口—A 坑底入脚坑底土
- 3 口—A 坑底入脚坑底土
- 4 口—A 坑—底土；坑底脚底入脚坑底土
- 5 坑底中坑底底土
- 6 口—A 坑—底坑底土；坑底入脚坑底土
- 7 坑底土；坑底土；坑底脚底入脚坑底土
- 8 坑底中坑底底土

第20图 第9号住居址



第21図 第10号住居址

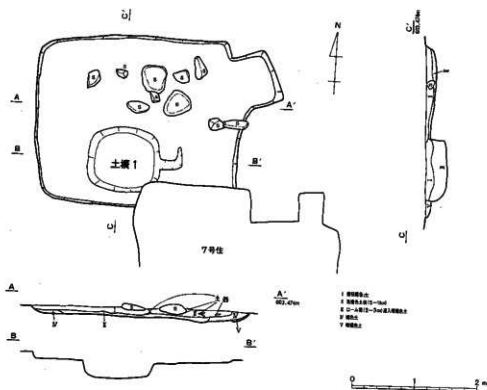
第10号住居址 (第21図)

第17地点の北西部に位置する。水田の鉄分沈澱層である床土中から遺物の散布がみられ、慎重に検出をすすめた。検出面は水田床土の真下である。覆土は非常に浅く、かろうじてプランを捉えた。本址西南隅には畑地の時の大きな穴があり攪乱部とした。規模は東西3.0m、南北3.2mを測り、方形を呈する。主軸方向はN97°Eを示す。壁は黄色土であり、壁高は2~4cmとかなり低い。床面も同色で固くはなっているが、表土剥ぎの際の重機の圧削の影響を受けている為正確にはわからない。ピット等の室内施設は検出できなかった。

カマドは、東壁中央やや北寄りに設けられた粘土カマドであろう。上部を削平しているので詳細には分らない。またカマド周辺の床面上、及びカマド外際に焼土が散布していた。

出土遺物は、灰釉碗、土師碗がほとんどである。上記の状況から床面に密着していたような遺物のみが本址には多い。又覆土の浅い割には比較的多い量であった。土器から見ると本址の所属時期は、平安末に比定することができる。

(高桑俊雄)



第22図 第15号住居址 土壇1

第15号住居址 (第22図)

17地点中央やや南寄りに位置する。南東部を7号住居址に切れ、又中央やや南寄りには土壇1が存在した。規模は東西約3.3m、南北2.7mを測り長方形を呈している。北東隅に幅約85cm、奥行50cmの方形の張り出し部を設けている。残存壁高は西10cm、東5cm程で非常に低いが急に落ち込んでいる。壁は黄色土を呈する。床面も同色で固く良好である。東側はわずかに低く緩やかな傾斜がみられる。ピット等は認められなかった。覆土中には平石を中心として、かなり多量の大型の石がみられほとんどが床面に接していた。

遺物は非常に多く、土師器環・椀・甕など約20個体を数えた。これらは住居址の東部に多く、多数が大型の石の下でつぶれて出土した。他には紡錘形の土錘が東側床面上から出土している。焼土は検出されなかったが、遺物が住居址内東側に集中しておりカマドは東壁にあったものと推定する。なおこの場合主軸はN93°Eを示す。遺物からすると、本址は平安末期のものとする。

(山下泰永)

第16号住居址 (第23・49図)

17地点、15号住居址西側に位置する。本址西側は20号住居址に、又南東部には土壇2がそれぞれ本址を切っている。黄褐色土中に検出できた。覆土は暗褐色土である。規模は南北約4.8mを測り、東西は4.5～5.0mになるものと予想する。不整形を呈し、北東隅には床面よりやや高い張出部が設けられている。又、南壁西側には80×80cm程の方形の入り込み部がある。残存壁高は南・北で約10cm程と低く軟弱であった。床面はやや黄色を呈し、中央部にはタタキが施され、非常に固い。又焼土が狭い範囲に認められ、その東には炭化物が埒がっている。西側床面上には平石が乗っている。ビットは東側に25×25cmのP₁、P₂2本が並んで検出されたがどちらも5cm (P₁)、10cm (P₂)と浅く柱穴としては不適當である。

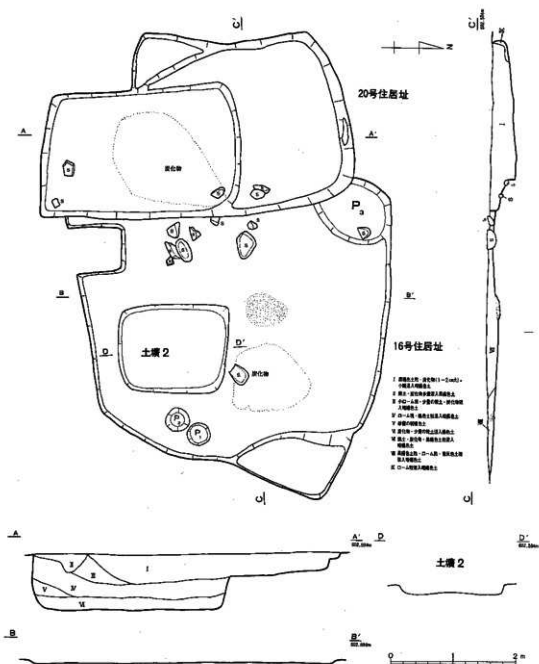
出土遺物は比較的少ない。灰釉碗を主体として、土師環、碗等がみられる。遺物は炭化物の存在した周辺と石の周囲、及びP₃からのものがほとんどであった。遺物より見て本址は平安末期のものとしたい。

第20号住居址 (第23・49図)

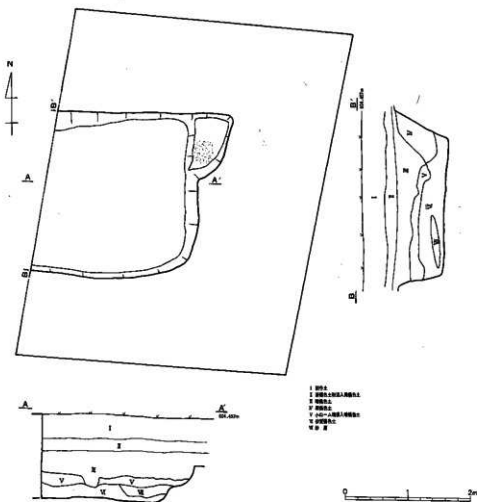
17地点の8号住居址北側に位置し、16号住居址を東側で切っている。規模は、東西約2.0ないし2.8m、南北約5.0mで、隅丸方形と隅の張った長方形を重ねた様な形である。検出面は黄褐色土であった。内部は段状を呈し、西の張り出した部分から北半部分、南半部分へと3段階に低くなっていく。壁高は北で30cm、南では90cm程を測る。南側の深い部分は黄褐色土層～砂質土層直上まで掘り込まれ、壁はやや袋状を呈し急に落ち込んでいる。床面は軟弱で炭が広い範囲に散布してみられた。北側の部分では、壁は黄色土でほぼ直に落ち込み、床面は砂質の土となり南側同様に軟弱である。なおビット等は検出されなかった。

遺物は少ない。南側の深い部分のIV～VI層に亘り5枚の銭が出土している。土器は土師質土器や須恵器の小片が認められたのみである。本址は特異な形が特徴的であり、特に南側と北側のレベル差が60cm程もある。この北側の浅部は7、8号住居址に見られるような張り出し部分とはやや形状が異なる。銭の出土より中世の住居址と考えている。

(三村 竜一)



第23图 第16、20号住居址 土坑 2



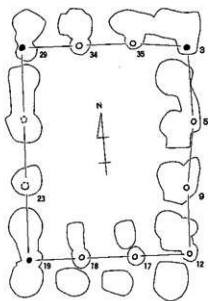
第25号住居址 (第24図)

第24図 第25号住居址

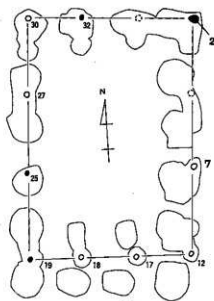
15地点に検出された。暗褐色土中に掘り込まれており、覆土はそれよりもやや黒いが遺物はほとんど含まれていない。覆土下層中に若干の砂利及び砂質の土を含んでおり遺構の東半分を検出したところで拡張を中止した。規模は南北で約2.5mを測るが全体を検出していないので詳細は明らかではない。恐らく長方形を呈するものと思われる。また北東隅に突出部を設けている。壁は床面から70~80cmとかなり高い。壁の傾斜は急に落ち込み突出部では段を作り出している。床面は均一な砂層となる直上を把えたが極めて悪い状態であった。尚ビットなどは検出されなかった。焼土が突出部中段上に見られるがカマドとしての施設は整っていない。

出土遺物は非常に少なく、プラン検出時から床面までに得られたものは指頭大の土器片3点のみであり、時期は不明である。上記の結果よりみて本址は住居址より土城とするのが妥当かも知れない。

(高桑俊雄)



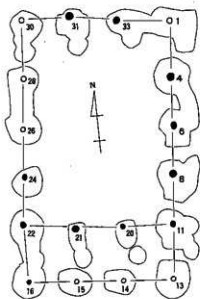
I 期



II 期



● 柱痕の明確なもの



III 期

第26図 建物址3 変遷図

2. 建物址

建物址 3 (第25・26・48図)

建物址 3 は11地点の東側17号住居址北側に位置しており、黄褐色土面で検出された。ビットの切り合いが多く、本来何本あったのかは定かではないが、計35箇所のビット底面が確認できた。この建物址は3期に分けることができる(第26図)。I期は $P_2, 8, 9, 12, 17-19, 23, 29, 34, 35$ 及びIII期の建物址を構築する際、 P_{26} によって消失したと考えられる1本を加えて計12本により構成されていよう。計測値は表1・2を参照されたい。II期は $P_7, 12, 17, 18, 19, 26, 27, 30, 32$ 及びIII期の $P_4, 23$ によって消失したと推定される2本のビットを加えて計12本により成る。この場合 $P_{12, 17-19}$ はI期のものをそのまま使用し、梁行は変わらず、北側に90cm程拡張したような形である。III期は $P_1, 4, 6, 8, 11, 12-15, 20-22, 24, 25, 28, 30, 31, 33$ の計18本であるが、II期で使用した P_{30} はそのまま使用し、棟の東が50cm、南が100cm程小規模化しているが、新たに南に180cmの庇を設けたと思われる。

I期からIII期にかけて、棟の主軸は $N3^\circ E$ 、 $N5^\circ E$ と変わっていないが、II期に棟がやや大きくなり、III期になる。また棟自体は小さくなるが、桁行の間数が1間ふえる。ビットはいずれもローム層まで掘り込まれているが、その深さは確実なものでI期51~79cm、II期32~83cm、III期31~127cmで、III期の庇用の浅くなっているビットを除けば、III期に移行するに従って深くしっかりと構築しているようである。尚、 P_8 (III)が P_2 (I)を、 P_{21} (III)が P_{18} (I)を、 P_{24} (III)が P_{23} (I)を、 P_{28} (III)が P_{27} (II)を、 P_{30} (II・III)が P_{26} (I)を切っている事がプラン確認の段階及びセクションで確認されている。

又 P_{19} と P_{22} の間にもう1本のビットを想定し P_{10} と対応させた場合、I期かII期の建物址に庇が設けられていた可能性があることを念頭に入れておきたい。

本遺構出土の遺物は、土師器の環が P_3 から3点(4・6)、 $P_{29, 30}$ から1点ずつ(3・7)、須恵蓋が $P_{7, 10}$ から1点ずつ(1・2)、須恵器の環が $P_{8, 16, 20, 23}$ からそれぞれ1点(8・9・10・11)出土している。

I~III期の建物址は同じビットを使用していることにより、継続して構築されたと思われるが、III期のものが4号住居址により切られているのでこれよりも古い。遺物からみるとそれ程の時期差はない。4号住居址に先行し、17号住居址と併行するものであろう。

表1 建物址3 I~III期一覧表

	平面形	規模 (間)	主軸方位	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法(m)		ビット
						桁	梁	
I期	長方形	3×3	N-3'-E	6.6	5.2	2.1-2.3	1.7-1.8	3・5・9・12・17-19・23・ 29・34・35 計11本
II期	長方形	3×3	N-3'-E	7.6	5.2	2.4-2.8	1.7-1.8	2・7・12・17-19・25・27・ 30・32 計10本
III期	長方形 (並有)	4×3	N-5'-E	6.5 庇1.8	4.8	1.5-1.8	1.6-1.7	1・4・6・8・11・13-16・ 20-22・24・26・28・30・31・ 33 計18本

表2 建物址3 ビット計測表

Pit No.	平面形	規模(cm) (長軸×短軸)	高さ (cm)	時期	切合関係	Pit No.	平面形	規模(cm) (長軸×短軸)	高さ (cm)	時期	切合関係
1	長方形?	89×?	74	Ⅱ	21号住居址に上部 切られる	19	—	73×?	76	I・II	
2	*	—	80	II		20	不整形長方形	89×68	77	III	
3	*	68×?	79	I		21	*	53×?	38	III	P18を切る
4	円形	径113	88	Ⅲ		22	円形	115×107	93	Ⅲ	
5	長方形?	—	61	I	P6に切られる	23	不整形	103×93	69	I	P24に切られる
6	軌立貝形	径89	96	III	P5を切る	24			83	Ⅲ	P22を切る
7	—	—	32	II		25			83	II	4号住居址に切られる
8	円形?	径90	127	Ⅲ		26	円形	103×?	118	Ⅲ	4号住居址に切られる
9	—	—	51	I		27	—	77×?	49	II	P28に切られる
10	楕円形?	56×?	76			28	不整形長方形	97×?	70	Ⅲ	P27を切る
11	不整形方形?	73×?	72	Ⅲ		29	円形	径69	50	I	P30に切られる
12	楕円形	54×?	40	I・II		30	不整形方形	96×85	90	II・III	P29を切る
13	五角形	123×107	74	Ⅲ	庇	31	—	108×97	61	Ⅲ	21号住居址に 上部切られる
14	*	101×78	32	Ⅲ	庇	32	—		31と近似	II	
15	不整形五角形	106×87	25	Ⅲ	庇	33	楕円形?	77×?	56	Ⅲ	
16	楕円形	115×103	70	Ⅲ	庇	34	円形	66×62	58	I	
17	円形	57×56	38	I・II		35	円形?	64×?	35	I	
18	楕円形	64×55	45	I・II	P21に切られる						

建物址4 (第27・28・48図)

本遺構は11地点の北隅に位置しており、黄褐色土面において検出された。南側には5号住居址と9号土壇がある。三方は時間の為検出を拡張しなかった。ピットは計33本確認されたが、うちP₁₅とP₂₂は都合上プラン確認のみに留めた。P₁₂、17、22にはピット底面が円形に灰褐色土化した明瞭な柱痕があり、P₃、7、9、10、12、17、20、23、25、28、30にも底面に痕跡がみられた。

ピットの対応関係は5通り考えられる。1つはP₂₋₇₋₉(a)で、それをP₁₋₄₋₆₋₈₋₁₀₋₁₆₋₁₈₋₂₂₋₂₇₋₃₀(c)が切っている。cは唯一建物址の規模が分かるもので、東西、南北それぞれ3間の5.7m、(柱間寸法1.8~2.0m)で方形プランを呈す。この場合、南に位置する建物址3との関連性がみつからないので、おそらく5号住居址と土壇9のため消失してしまった2本のピットがあったものと思われる。このcはP₁₀₋₂₁₋₂₅の柱列(b)を切り、P₂₀₋₂₃₋₂₈₋₃₁(d)に切られる。bは3本のピットよりなるが北及び東に続くものと思われる。dも南方に対応するピットが存在しないのでb同様北及び東に続くものとする。

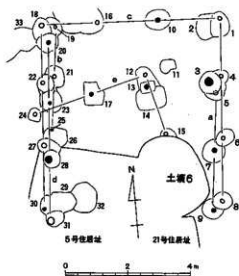
次にP₁₂₋₁₅₋₁₇₋₂₄(e)が想定されるがプラン確認の段階で覆土上層においてP₂₄がP₂₃を切っているのでdより新しい。eは深さが10~26cmと浅いため、P₁₅の南に続くピットが土壇9の中に消失してしまったと思われる。このようにみると、aとbの新旧関係は不明であるが、それ以後c→d→eの順に構築されたことがわかる。これらは、主軸及び柱列の方位が北から大きくそれることなく柱間寸法もbの1.6mとやや小さめになるのを除けば1.8~2.0mとほぼ一定している。

この他に確認されたピットが9本程あるが、P₃とP₁₃が対応し東及び南方に続く可能性がある。それ以外は不明である。

本遺構出土の遺物は、須恵器の壺1点、坏2点である。(12~14)

これらの建物址は継続して構築されたようであり、その時期は中世と思われる5号住居址と土壇9より古い。おそらく、建物址3とそれ程隔らない奈良時代から平安時代初頭にかけてのものであろう。

(吉田 浩明)



● 柱痕の明確なもの

第28図 建物址4 交通図

表3 建物址4 a~e一覽表

	平面形	規模 (間)	主軸あるいは 柱列方向	長さ (柱間：m)	柱間寸法 (m)	ピット数
a	?	現存 2間	N-6'-E	3.8	1.9	5・7・9 計3本
b	?	“ 2間	N-7'-E	3.3	1.6	19・21・25 計3本
c	方形?	“ 3×3間	N-4'-E	南北 5.7 東西 5.7	1.8-2.0	1・4・6・8・10・16 18・22・27・30 計10本
d	?	“ 3間	N-4'-E	5.7	1.8-1.9	20・23・28・31 計4本
e	?	“ 2×1間	N-13'-W	南北 2.0 東西 3.6	1.8-2.0	12・15・17・24 計4本

表4 建物址4ビット計測表

Pit No	平面形	幾何(cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	所属	切 合 関 係
1	卵 形	80×60	36	e	
2	楕 円 形 ?	82×58	55	—	P 1に切られる
3	不 整 円 形	72×68	45	—	P 4・5を切る
4	楕 円 形 ?	51×?	22	c	P 3に切られる
5	楕 円 形 ?	69×60	22	a	P 3に切られる
6	楕 円 形	69×50	22	e	P 7に切られる
7	円 形	76×72	32	a	P 6を切る
8	楕 円 形	69×56	10	c	P 9に切られる
9	不 整 円 形	67×63	38	a	P 8を切る
10	楕 円 形	81×63	55	c	
11	不 整 形	53×44	11	—	
12	不 整 長 方 形 ?	64×?	10	e	P 13に切られる
13	長 方 形	52×35	59	—	P 12を切る
14	長 方 形	96×71	39	—	
15	円・楕円形?	—	—	e	ブラン確認のみ 土域9に切られる
16	円 形	97×91	53	c	
17	か ぎ 形	73×65	26	e	
18	—	—	—	c	
19	円 形 ?	65×?	—	b	
20	円 形 ?	67×?	56	d	
21	円 形 ?	76×69	31	b	P 22に切られる
22	不 整 円 形	54×50	25	c	P 21・23を切る
23	円 形	75×69	56	d	P 22に切られる
24	かまぼこ形	40×38	15	e	
25	円 形 ?	—	22	b	
26	—	—	26	—	
27	楕 円 形	77×66	27	e	P 28に切られる
28	円 形	54×52	36	d	P 27を切る
29	不 整 長 方 形	84×65	18	—	P 31に切られる
30	楕 円 形 ?	61×60	16	e	P 31に切られる
31	楕 円 形	—	67	d	P 29・30を切る
32	円 形	96×80	—	—	ブラン確認のみ P 29に切られる
33	長 方 形 ?	73×?	67	—	

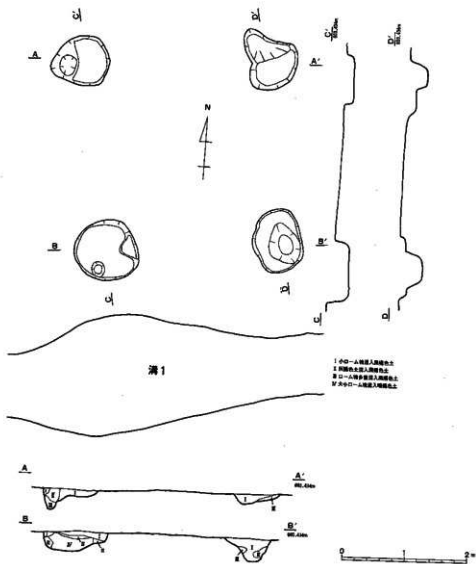
建物址 1 (第29図)

17地点の溝 1 北側土壇11~14の南側に検出された1間×1間の建物址である。個々の柱穴は円形ないし楕円形の大型の不整形を呈する。深さは15~35cmとまちまちで大きさの割に深さが浅い。内部構造は片側へ寄った二段底を呈するものが多い。土層を観察しても柱痕は見られなかった。柱間は南北で290~310cm, 東西で約290cmで、南にある溝1までの距離は約60cmと溝を意識していたのかもしれない。なお遺物は小片のみであった。

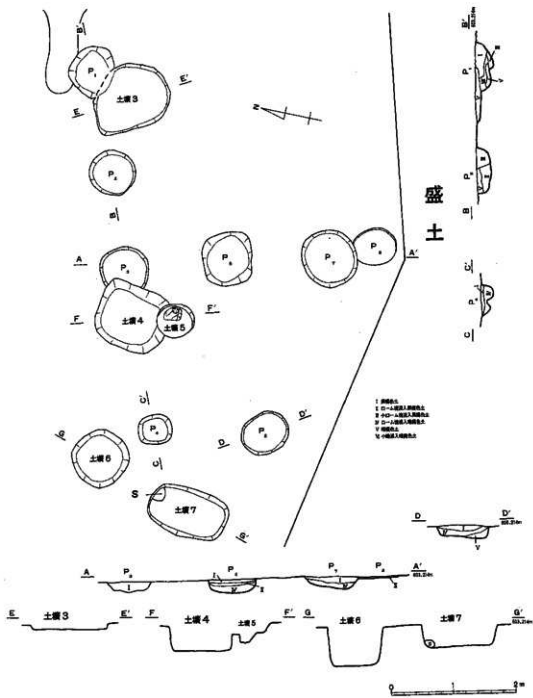
建物址 2 (第30図)

第17地点、南東隅に検出された。ここは第6号住居址の西側にあたり住居址の煙道の一部を本址 P_1 が切っている。又この周辺に土壇3~7があり本址の P_1 が土壇3に、又 P_2 が土壇4にそれぞれ切られている。なおこれらの土壇は土色が同じで皆一層のみとなっており、建物址と明らかに異なるため西の P_4 、 P_5 も含めて本址は8本の組み合わせとして扱ったのである。個々の柱穴はほとんど円形を呈し最大のもので90×85cmを測る。深さは P_1 で25cm程であり他は建物址1と同様に皆比較的浅い事がわかる。又上面、断面においても柱痕跡は見ることができなかった。本址南側へは時間的制約の為調査範囲を拡張しなかったので建物の全容は分からないが、恐らく東列を欠く2間×3間で棟に平行する庇を設けるものと考えている。なおその場合の棟方向は $N20^{\circ}W$ を示す。

(高桑俊雄)



第29圖 遺物址 1



第30圖 建物址2 土壇3~7

3. 土 壇 (第12・13・22・23・30～32図)

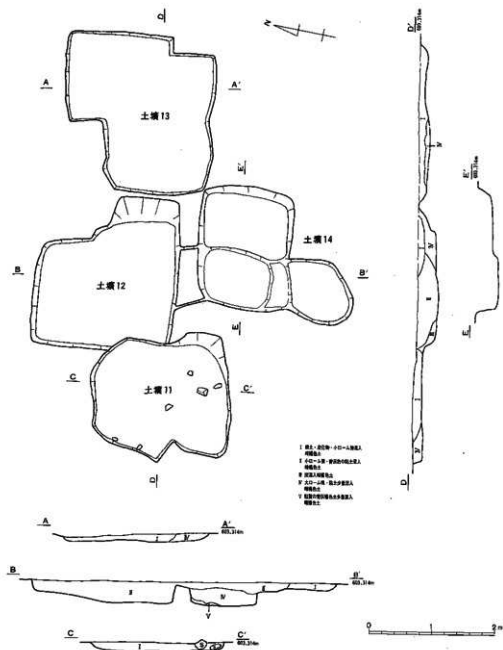
11地点から4基, 12地点から3基, 17地点から12基の計19基の土壇が検出された。但し, 土壇 11～14 は平面形が不整形なうえ底面がいくつか確認されたのでいずれも2～4つの土壇の重複があると思われる。それらを除くと平面形は円形, 楕円形, 長方形またはそれに近いものがほとんどである。ただ, 土壇 9 は他と異なり262×248cmと大形で, すり鉢状を呈している。土壇 5 の底面東側に15cmのピット状の落ち込みがある。

遺物には時期, 性格を明らかにするようなものは見当たらない。土壇 7・9～11から小石及び礫が出土している。

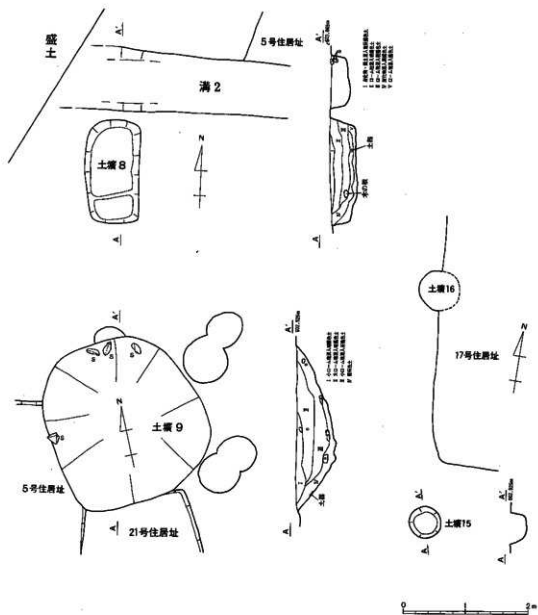
(吉田 浩明)

表 5 土壇一覧表

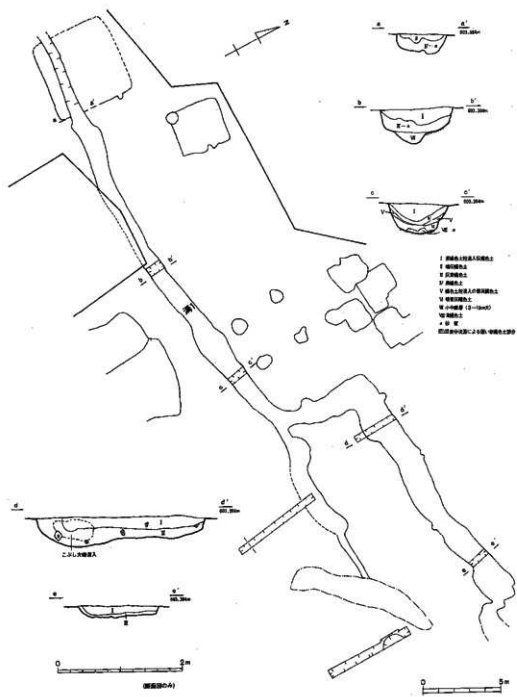
No.	平面形	規模(cm) (長軸×短軸)	深さ(cm)	断面形	備 考
1	隅丸長方形	116×103	28	逆台形	15号住居址を切る。東側に縄状の貼出部があるが浅い。
2	長 方 形	174×141	14	逆台形	16号住居址を切る。
3	不整楕円形	123×103	8	逆台形	建物址2のP ₁ に切られる。
4	不整長方形	116×101	42	逆台形	土壇5に切られる。
5	楕 円 形	61×53	16	逆台形	土壇4を切る。底面東側に15cmの落ち込みあり。
6	隅丸方形	89×86	61	逆台形	
7	長 方 形	126×78	34	逆台形	石出土
8	長 方 形	165×86	42	逆台形	底面南側にわずかな段を有す。
9	不 整 形	262×248	63	すり鉢形	建物址4 P _{1a} を切る。礫出土。
10	楕 円 形	59×41	30	逆台形	19号住居址を切る。礫出土。
11	不 整 形	222×195	16	皿 形	土壇12を切る。底面にわずかに段を有す。礫出土
12	不 整 形	245×224	36	逆台形	土壇11に切られる。底面2つ存在
13	不 整 形	253×240	18	皿 形	底面2つ存在
14	不 整 形	253×196	37	逆台形	底面4つ存在
15	円 形	50×50	26	逆台形	
16	円 形	63×(65)	—	—	17号住居址に切られる
17	楕 円 形	52×44	14	逆台形	18号住居址を切る
18	楕 円 形	(68)×52	19	逆台形	17号住居址に切られる
19	不整長方形	66×49	16	逆台形	



第31圖 土塚11~14



第32图 溝 2 土壇 8, 9, 15, 16



第33圖 溝1

4. 溝

溝1 (第33図)

第17地点のほぼ中央を東西へはしる幅1.3~1.8m、長さ約40mを検出したが、第9号住居址以西は確認できなかった。溝底レベルより西から東へ流れていたと考えられる。平安時代中期の第9号住居址をきって東流するこの溝は、建物址1の東3.3mのところで分流する。ひとつは、幅を広げ北へ流れをかえたのち再び東流し、もうひとつは0.4~0.6mと幅をせばめるがそのまま直流する。ふたつに分れた溝はほぼ平行して東へのびるが、東端は自然堆積の礫の露出のため追求できなかった。

溝は断面U字形で、溝底はB、C点で見ると鉄分沈澱による非常に固い赤褐色土である。溝内には、一部で溝底に礫が堆積していたが、砂質土層が堆積し、その上層に鉄分を含む茶褐色土粒混入灰褐色土層があるのが基本である。出土遺物には、陶器、灰釉陶器がある。

溝2 (第32図)

第11地点北側で検出された、東西にのびていたと思われる、幅0.9~1.0m、長さ3.2mの溝である。この溝は、中世に属する第5号住居址をきっているが、住居址のなかほど以西は重機による削平のため検出できなかった。溝は幅広のU字形を呈し、溝底の幅は約70cmである。溝は西から東へ流れていたようである。溝内には青灰褐色土が堆積していたが分層はできなかった。

溝3 (第18図)

第11地点の南端にある。若干北にゆるかには東西にのびる長さ8.45mを検出した。発掘区の南端で溝の北側だけ検出されたため、溝の中ほどを1ヵ所、南へ拡張したが、溝の南側は検出できなかった。そのため、溝の幅は不明である。またこの溝は、奈良時代に属すると思われる第22・23号住居址をきっている。

拡張区の南端においても溝底はさらに南へもぐりこんでおり、溝の全体の形状はわからない。溝には灰色の砂層が堆積し、下部では小礫を混入しているが、新しい堆積のようである。溝は、溝2と同様に西から東へ流れていたと思われる。出土遺物には須恵器、灰釉陶器がある。

溝4 (第19・49図)

第14地点の南端をほぼ西北西—東南東へはしる溝である。当初、発掘区の南端で溝の北側しか確認できなかったのも、東側を一部拡張した。溝の南半を確認した結果、幅2.3m、長さ11.8mを検出でき、西から東へ流れていた溝と判明した。この溝は、奈良時代に属する第24号住居址及び集石1をきっており、中世の遺構と考えられる墓址2・3によってきられていた。

溝は、南側が、遺構検出面から26cm下で一度、40cm幅の平坦面をなしたのち、急角度で溝底に落ち込み、段をなしている。溝底は幅約90cmで平坦であり、北側は段をなすことなくちあがっている。遺構検出面から溝底迄は94cmをはかるが、溝内は2層に分層できるのみであった。また、セクションにはかかってないが、下層の砂質の青灰褐色土層の上部で大きな角礫の混入がみられる部分がある。この角礫は、溝の埋没過程で人為的に投入された可能性が大きい。

出土遺物は、溝底から1ヵ所にまとまって出土した宋銭3枚がある。一枚は熙寧元宝であり、他の2枚は重なった状態で出土しているが、銭名は判読できなかった。このほかに土師器・須恵器小片が出土している。

溝5 (第19図)

第14地点の東を北北西～南南東の方向にはしる幅0.45～0.54m、長さ10.52mを検出できた溝である。この溝も溝4と同じく、奈良時代に属する第24号住居址をきっている。溝底レベルから、溝は南流していたようである。また、溝4と溝5は、溝底レベルで25cmの違いがあるが、両者の関係は追求できなかった。

溝は、東下がりの溝底で、底からはほぼ直にちあがっている。溝内には、暗褐色土層が堆積し、3層に区分された。出土遺物には土師器がある。 (関沢 聡)

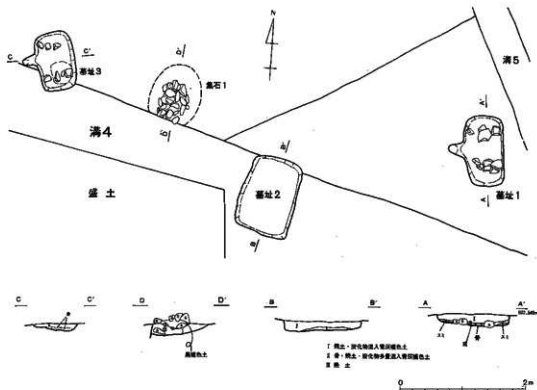
5 墓址 (第34図)

14地点に計3基を検出した。これらは耕作土下の床土直下を重機で剥いだ際、赤褐色の輪郭で確認している。切合関係も2と3は、24号住居址より新しい溝4を切っている。平面形態は隅丸の長方形(2)で長軸の中央に突出部をもつ(1・3)ものもある。規模と長軸方向は次の通りである。

1—110×60cm N5°W, 2—120×90cm N15°E, 3—95×60cm N13°W

内部の状態を見ると1では拳大から小児頭大位の石が4、5ヶずつ空間部を設け配置されており、このようすは3も同様であった。又検出面からは浅いが壁は突出部で緩やかに、他の場所は比較的急に落ち込んでいる。土層は下層へ行く程炭化材、骨が多量に混ざり合い底面と壁面は赤褐色を呈し固く焼土化していた。1・3については並べられた石は棺台で突出部は焚き口であり、この場所において火葬を行なった結果と推察する。又突出部のない2は石が全然見られない。1・3に比べると焼土は若干少ない。1・3程高温にならなかった為であろう。

遺物は骨が多量にある。この骨は細かく炭化材片、土と混入しており拾い分けられない程である。2からは銭が2点出土している。他に釘などは見当らなかった。溝との切合、銭等から見て中世の火葬墓と考える。



第34図 墓址1～3 集石1

6. 集石

集石1 (第34図)

墓址2・3との間に検出した。拳大程度の川原石が約40個程60×50cmの範囲で集まっていた。24号住居址覆土中であり、南隅を溝4に切られている。平面では集石に伴う土壇は検出できなかった。土層断面によると落ち込み状態はかなり緩やかなもので、石の上面から底面までは約30cmであることがうかがえる。又土壇底面は軟弱で土層でかろうじて判る程度である。石は第1層中に多く中には骨・焼土・他の遺物などは全く見られない。

切合関係からして、奈良時代以降の時期と考える。又周囲に火葬墓が3基検出されておりこの地が墓域として扱われてきた事を含め考えると埋葬後に石を乗せた土葬墓と推定する。

(高桑俊雄)

第3節 遺物

1 土器

1) 弥生時代の土器

第11地点の検出面から1点のみ一括出土した(第49図1)。口縁端部に最大径をもつ甕形土器で胴下半部を欠いている。口縁端の刻み、胴部の斜行条線文などから、中期後半に位置づけられると考えている。他に弥生土器の出土はない。

2) 奈良・平安時代の土器

今回の調査で出土した土器の主体をなす。土師器・須恵器・施釉陶器があり、器形では、土師器に環・埴・皿・甕・小形甕・羽釜・高環、須恵器に蓋・坏・高環・壺・罍・甕、施釉陶器に埴・皿・瓶など多種にわたる。時期的には8～12世紀代にかかるものであるが、概ね3～4期にまとめることができる。今回提示できた資料を用いて、種別・器形別及び特徴を略述したい。

須恵器

環：有台と無台のものがある。有台のものは、第6号住居址と第18号住居址の出土品に少量みられる程度である。無台のものは、第6・17・18号住居址及び建物址3・4にみられ、更に底面調整により、回転糸切り痕をもつものと、そうでないものに二分できる。前者は第6・17号住居址、建物址3・4の出土品に、後者は第18号住居址の出土品において中心的である。回転糸切り痕をもたないものは概して丸底気味であり、底面にはへら切り、回転へらケズリ、手持ちへらケズリなどの痕跡を残している。底部と体部の境に稜をつくるものと、グラグラと移行するものがみられる。

蓋：屈曲する端部の外面に明瞭な稜をつくるものと、稜がにぶいものの2種がある。明瞭な稜をつくるものは第6・17号住居址及び建物址3・4より、にぶい稜のものは第18号住居址から出土している。いずれも天井部は回転へらケズリされる。つまみの形態は欠損があつてわからない。

高環：第6号住居址から出土したものを提示できた。脚部のみの破片で、裾端部が面取られ、坏部よりに沈線が2本めぐっているのがわかる。

罍：第6号住居址から出土している。小破片から器形を推定した。頸部が短く肩に稜をもつ、最大径が口縁端にある罍になると考えられる。

壺・甕類は破片を散見するが、図化できるものはなかった。甕は頸部の横描文を2点、拓影で提示できたにすぎない。

土師器

環：底面に切り離し痕を残すものと、調整して丸底気味に仕上げているものの2種がある。高台

のつくものは塊として区別した。丸底気味のものは数が少く、第6号住居址4と第17号住居址4及び建物址3の4の3点を提示できただけである。いずれも内外面を丁寧にヘラミガキされて、第6号住居址4は内面に放射状の暗文をもち、他の2者は内面を黒色処理されている。底面に切り離し痕をもつものは、第1・14・18号住居址と第6号住居址上層から出土している。ただし第18号住居址からのものは須恵器の同種の坏にまじって2点存在したにすぎない。いずれも丁寧に内面調整がみられる。一方、第1・14号住居址及び第6号住居址上層からのものは、全体的に口径が小さく、内面調整もあまりみられないものが多い。この種のものには内面黒色処理はみられない。

坑：基本的には、底面に糸切り痕をもつ坏類に高台のついたものと理解されたい。第1・14号住居址及び第6号住居址上層より出土しており、この点で、口径が小さく、底面に切り離し痕をもつ坏に伴うものと言えよう。内面を黒色処理されるものとそうでないものがある。

甕：一括品が第17・18号住居址より得られた他、各住居址で破片の出土をみた。第17号住居址のものは器全面がハケメで調整され、比較的厚手、第18号住居址出土品も外面に縦のハケメをもつ。第1・14号住居址からのものは、口縁端部が面取りされる点に特徴がある。

小形甕：胴部が球形ないし楕円体に近い形状を呈するもので、小形の甕ではなく、甕とは別に器形を意識して製作されたと考えているものである。第6号住居址15は底面に木葉痕をもち、胴部外面にヘラケズリを施されている。これに対し第14・18号住居址から出土しているものは基本的にクロ回転を用いた整形によっており、底面に回転糸切り痕を残している。

羽釜：第14号住居址から胴部片が出土している。鈿は僅かに上へ反り、鈿を除くと最大径は胴部中位にくる器形をとるものと推定している。外面はハケメで整形される。

高坏は脚部の破片を散見するか図示できたものはない。

施釉陶器

灰釉陶器と緑釉陶器がある。灰釉陶器は、第1・14号住居址及び第6号住居址上層から出土している。坑・皿とも高台が高く、釉は潰けかけされるものである。緑釉陶器は皿類の小破片と推定される。

時期的な特徴

今回提示した奈良・平安時代の土器は、同一器形内での形態・手法の差と、各器形の組み合わせにより次の時期に分けられる。Ⅰ：底面に回転糸切り痕を持たない須恵器無台坏、須恵器高坏・球、底面に切り離し痕を残さず器面をヘラミガキされる土師器坏・高坏・クロ回転を用いない小形甕内面をハケメ整形される甕を伴出。Ⅱ：底面に回転糸切り痕を持つ須恵器無台坏、底面に切り離し痕をもち内面がミガキ整形される土師器坏を伴出。高坏・瓦はみあたらない。Ⅲ：底面に回転糸切り痕をもち内面ミガキ整形がない口径の小さな土師器坏、土師器坑が伴出。須恵器坏類は消滅。灰釉陶器類が伴出。以上の時期に対応するのは、Ⅰ：第6・17号住居址、Ⅱ：第18号住居址、Ⅲ：第

1・14号住居址・第6号住居址上層の出土土器群と考えている。ただしこのI～IIIの各時期に連続性があるわけではない。各期の実年代の比定は、今回の発掘では伴出資料がなかったので確定でき難いが、各遺跡での先学の成果を参考にするとIは8世紀代、IIは9世紀代後半～10世紀代、IIIは12世紀代を想定するのが適当とみている。

3) 中世の土器

第5・7・8号住居址から出土している。土師質土器と陶器がある。土師質土器に皿と羽釜、陶器に壺・甕・壺などの器形がみられる。土師質土器の皿はロクロ水挽き成形で底部に粗い回転糸切り痕をもつ。羽釜(第5号住居址5)は、銕の部分を除くと最大径が口縁部にあり、胴部が内湾しながら丸味をもって底部へおさまる器形をとり、外面を縦のハケメで整形している。銕はハケメの後に付したものである。陶器の碗類は図示できたものでは、第7号住居址1、第8号住居址5・6がある。第7号住居址からのものは天目茶碗、第8号住居址5は僅かな部分を欠くのみ逸品で15世紀の産の瀬戸灰釉平碗と鑑定されている。甕類は第7号住居址5を提示した。薄褐色の淡い色調で須恵器質の胎土をもっている。壺は、第7号住居址の覆土中から出土している4がある。器高41cmを測る常滑焼の壺で、赤茶色の地に茶緑の釉がかかり、肩部に三本の沈線と印花文をもっている。口縁部のつくりからみて14世紀の産と考えられる。

時期的にみると、第5号住居址の出土品が他より比較的古く、第7・8号住居址からのものは、それぞれ、常滑焼の壺と瀬戸灰釉平碗によって想定される年代をあてるのが妥当と考えられる。

(直井 雅尚)

2 石器・石製品について

遺跡内から出土した石器・石製品は表7の如くである。石鏃、敲打器は石器時代のものであろう。遺構にかかわる遺物には砥石がある。ここでは砥石について触れてみたい。9点のうち6点が、砂岩、2点が凝灰岩、1点はこの種に用いるのは、珍しいチャート製である。砂岩は周辺で容易に手に入るものであるが、凝灰岩(3、7)は近辺に産地など見当らず特別に砥石用として筑北、北安曇からでも入手したものであろう。又チャート(10)は鎮川上流部にその産出を見る。質は良くない。おそらく砂岩で荒砥した後に凝灰岩のものと共に中砥あるいは仕上げとして用いているものと見られる。又第6号住居址から丸石が3個出土している。このうち1個は小見拳大の安山岩(13)である。これは焼岳、乗鞍岳などで産し梓川で転石を入手したものと考える。

なお石質分類については太田守夫氏に御教示を受けた。

(高桑 俊雄)

表6 実測土器一覽表

図	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)			色調		成型調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
1	第6号住居址	須志器	甕	14.0	—	2.6	灰～青灰	灰～青灰	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
2	"	"	"	16.7	—		灰 白	灰 白	" " "	
3	"	"	"	13.6	—		灰白～灰	灰白～灰	" " "	
4	"	土師器	坏	16.1	(10.2)	5.1	橙～赤橙	橙～赤橙	ヨコナデ・ヘラミガキ・方射状暗文	
5	"	須志器	"	12.3	(8.6)		青 灰	青 灰	ロクロナデ・底面回転ヘラケズリのちナデ	
6	"	" ?	"	12.8	6.4	3.9	黄 灰	灰 黒	" ・底面手持ちヘラケズリ	焼成が悪く土師器にみえる
7	"	"	"	15.7	12.8		青 灰	青 灰	" ・底面回転ヘラケズリ	
8	"	"	"	13.4	10.6		灰 白	灰 白	" " "	
9	"	" ?	" ?	11.4			薄青灰	薄青灰	"	長頸壺口縁の可能性
10	"	"	"		7.9		赤 桃	暗 赤	" ・底面粗い放射状のハケメ	
11	"	"	"		9.2		橙	橙	" ・底面回転ヘラケズリ・ツケ高台	
12	"	"	高 坏		9.9		暗青灰	暗青灰	" ・内面黄しほり痕・外面に沈線	
13	"	"	腹		11.9		黒 灰	黒 灰	"	黄灰色の自然釉
14	"	土師器	埴		11.9		黄灰～黄橙	黄灰～黄橙	ヨコナデ・ヘラケズリ	
15	"	"	小形甕		5.8		暗 褐	暗 褐	" ・外面ヘラケズリ・内面ハケメ・底面木葉痕	
16	"	須志器	甕				暗 灰	暗 灰	撫指液状文・横位沈線	拓影、白と緑の自然釉
17	"	土師器	坏	11.6	5.3	3.3	黄灰～暗褐	黄 橙	ロクロナデ・底面回転未切り	
18	"	"	"	11.7	4.9	3.2	橙～赤橙	橙～赤橙	" " "	ほぼ完形
19	"	"	"	12.3	5.3	3.2	橙	橙	" " "	
20	"	"	"	12.1	5.9	3.3	橙～赤橙	橙～赤橙	" " "	
21	"	"	"	11.4	5.0	3.3	橙	橙	" " "	
22	"	"	"	11.7	5.5	3.1	橙～暗橙	橙～暗橙	" " "	
23	"	"	"	11.7	5.3	3.3	橙～黄橙	橙～黄橙	" " "	完形
24	"	"	"	11.8	5.0	3.4	"	"	" " "	完形
25	"	"	埴	15.2	6.8	5.8	黄褐～暗褐	黄褐～暗褐	" " " ・ツケ高台	
26	"	"	"	14.6	7.4	4.9	黄橙～黄灰	黄橙～黄灰	" ・ヨコナデ・ツケ高台	
27	"	"	"	14.4	7.2	4.4	黄橙～橙	黄橙～橙	" ・底面回転未切り底・ツケ高台	ほぼ完形・底面が黒色
28	"	"	"	18.2	10.6	5.1	淡茶褐～黄褐	淡茶褐～黄褐	" " "	
29	"	灰釉陶器	"		7.3		灰白～灰	灰白～灰	" ・底面回転ヘラケズリ・ "	
30	"	"	"	15.8	7.9	4.8	灰 白	灰 白	" ・ナデ・ツケ高台	僅かに黄色味の釉
31	"	"	"	15.9	8.2	5.0	"	"	" ・底面中央回転ヘラケズリ・ツケ高台	透明な釉
32	"	"	皿	12.6			"	"	"	"
33	"	"	甗		8.0		"	"	" ・体部下半回転ヘラケズリ・ナデ・ツケ高台	淡緑の釉

図	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)			色調		成形調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
1	第17号住居址	須恵器	蓋	16.6	—		薄青灰	薄青灰	クロコナデ・天井部回転ヘラケズリ	
2	"	"	"	16.2	—		灰白～灰	灰白～灰	" " "	
3	"	"	"	13.3	—		青灰	青灰	" " "	重ね焼痕あり
4	"	土師器	坏	12.4	8.8	4.1	黄褐	黒	ヘラミガキ	内黒
5	"	" ?	"	11.9	(4.8)	3.9	薄黄灰	薄黄灰	クロコナデ	
6	"	須恵器	"	13.6	8.9	3.7	青灰	青灰	"・底面手持ちヘラケズリ・体部外面に沈線	
7	"	"	"	13.2	(6.6)	4.3	暗青灰	"	"・底面周面回転ヘラケズリ・底面静止糸切り?	
8	"	土師器	甕	17.1			黄灰	黄灰	ヨコナデ・ヘラケズリ	
9	"	"	"	21.9			黄褐～黄灰	黄褐～黄灰	"・外面ミガキ様ヘラナデ・内面ナデ・ハケメ	
10	"	"	"		8.3		黄橙～薄橙	黄橙～薄橙	ヘラケズリ・ハケメ・指頭圧痕	
11	"	"	"		8.4		黄褐	暗褐～灰褐	内外面ハケメ・底面もハケメ	
12	"	"	"		6.8		"	橙褐	外面ヘラケズリ・内面細かいカキメ状ハケメ	
13	"	"	"	25.5		(39.5)	薄橙～淡暗褐	薄橙～淡暗褐	外面上半部ハケメ・下半部ハケメ・内面横ハケメ・ヨコナデ	一括品
1	第18号住居址	須恵器	蓋	13.0	—		暗赤褐	暗赤褐	クロコナデ・天井部回転ヘラケズリ	
2	"	"	"	14.9	—		褐	褐	" " "	
3	"	"	"	15.9	—		青灰	青灰	" " "	
4	"	土師器	坏	14.2	6.6	5.3	黄褐	黒	"・ヘラミガキ	内黒
5	"	"	"	11.5			"	暗褐	"	
6	"	"	"		7.0		赤橙	赤橙	内面に放射状(鋸歯状)端文	
7	"	須恵器	"	13.2	7.4	3.5	青灰	青灰	クロコナデ	
8	"	"	"	13.0	7.4	3.8	"	"	"	
9	"	"	"	15.2			"	"	"	
10	"	"	"		9.4		青灰～黄灰	"	"・底面回転ヘラケズリ	
11	"	"	"		7.5		淡青灰	淡青灰	"	
12	"	"	甕				暗青灰	暗青灰	横線列点文	括弧
13	"	土師器	"	21.4			淡暗褐～黒褐	淡暗褐～黒褐	ヨコナデ・外面ハケメ・内面ナデ	一括品
1	第1号住居址	"	坏	12.2	6.5	4.5	黄褐	黒	クロコナデ・回転糸切り	内黒
2	"	"	"	12.9	5.4	4.1	"	橙褐	" " "	
3	"	"	"	14.6	5.9	4.3	暗褐	黒	" " "	内黒
4	"	"	"	15.3			黄橙	"	"	
5	"	"	"	11.9	6.1	4.3	暗褐	暗褐	"・回転糸切り	
6	"	"	"	13.5	6.0	3.4	"	黒	" " "	内黒
7	"	"	"	13.5	5.7	4.2	黄褐	黄褐	" " "	

図	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)			色調		成形調整・形態の特徴	備考
				口徑	底徑	器高	外面	内面		
8	第1号住居址	土師器	坏	14.2			暗褐	黒	ロクロナデ・ヘラミガキ	内黒
9	"	"	"		5.7		黄褐	暗褐	"・底面糸切り痕	
10	"	"	小形甕		7.0		暗褐	"	"	内黒
11	"	"	坏		5.6		黄褐	"	"	
12	"	"	"		5.6		黄褐	黒	"	内黒
13	"	"	"		5.1		暗褐	"	"	
14	"	"	埴		6.8		"	暗赤褐	ロクロナデ・ツケ高台	"
15	"	"	"		6.0		"	黄褐	"	
16	"	灰釉陶器	瓶		8.0		灰白	灰白	"	"
17	"	"	埴?		7.0		"	"	"	
18	"	須恵器	壺?		3.3		青灰	青灰	"・底面回転糸切り痕	"
19	"	土師器	甕	22.0			暗褐	暗褐	胴部外面口縁内面にハケメ	
1	第14号住居址	"	坏	13.6			明黄褐	黒-黄褐	ロクロナデ・ヘラミガキ	内黒(不完全)
2	"	"	"	12.0	5.6	3.7	黄褐	薄赤褐	"・底面回転糸切り	
3	"	"	"	10.6	5.7	2.2	"	黄褐	"	赤み
4	"	"	"	11.7	5.6	3.4	黄褐-暗褐	黄褐-暗褐	"	
5	"	"	"	11.4	4.2	3.7	黄褐	黄褐	"	"
6	"	"	"	12.3	6.3	3.7	"	"	"	
7	"	"	"	12.4	6.2	3.2	淡黄褐	淡黄褐	"	"
8	"	"	"	12.1	6.3	3.7	黄褐	淡赤褐	"・底面回転糸切り	
9	"	"	"	13.2	6.3	3.7	"	黄褐	"	"
10	"	"	"	13.9	7.2	3.1	暗褐	"	"	
11	"	"	"		5.5		"	黒	"・ヘラミガキ	内黒
12	"	"	"		6.0		黄褐	黄褐	"	
13	"	"	"		6.1		灰褐	"	"	"
14	"	"	埴?	19.4			黄褐-暗褐	黄褐-暗褐	"	
15	"	"	"	14.0	5.8	4.7	明黄褐	薄赤褐	"・ツケ高台・底面糸切り痕	"
16	"	"	"		7.8		黄褐	黄褐	"	
17	"	"	"		8.0		暗褐-茶褐	黒	"・ヘラミガキ	内黒
18	"	"	小形甕	10.9			明黄褐	明黄褐	"	
19	"	"	"	11.6			暗橙	暗褐	"	"
20	"	"	"	10.0	5.6	9.3	暗褐-茶褐	明黄褐	"・底面回転糸切り	
21	"	"	"		7.2		暗茶褐	暗茶褐	"・外面カキ目・底面回転糸切り	

図	出土地点	種別	器形	寸法 (cm)			色調		成形調整・形態の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
22	第14号住居址	土師器	小形甕?		8.3		茶 褐	暗 褐	ロクロナデ	
23	"	"	"	23.5			黄 褐	黄 褐	ヨコナデ・ナデ	
24	"	"	羽 蓋				黄褐～暗褐	黄褐～暗褐	外面縦ハケメ・ヨコナデ・ナデ	
1	第5号住居址	土師質土器	皿	10.0	5.8	1.3	薄こげ茶	薄 茶	ロクロナデ・底面回転糸切り	
2	"	"	"	9.5	4.1	1.7	薄 茶	"	"	・内面中央にヘソ状窪み
3	"	"	"	9.8	4.8	1.7	薄茶灰	薄茶灰	"	・内面は型押し
4	"	"	"	8.7	4.2	1.7	薄 茶	薄 灰	"	"
5	"	"	羽 蓋	23.6	9.2	21.3	黒 褐	黒 褐	ヨコナデ・外面縦ハケメ・内面ナデ	
1	第7号住居址	陶 器	碗	11.8			釉:黒	胎:灰白		天目茶碗
2	"	土師器	杯		5.2		赤 褐	赤 褐	ロクロナデ・底面回転糸切り痕	
3	"	"	"	11.5	4.6	3.6	明 茶	明 茶	"	
4	"	陶 器	壺	21.4	15.6	40.9	赤 茶	ぬす茶	5段の粘土まきあげろくろ整形・肩部内面指圧痕	肩部に印花文・常滑
5	"	"	甕		22.5		薄 茶	薄茶灰	ロクロを使用しているか?	
1	第8号住居址	須恵器	杯	14.6	8.2	2.8	灰 白	灰 白	ロクロナデ	
2	"	"?	浅		7.3		薄青灰	薄青灰	"	・底面回転糸切り痕
3	"	須恵質土器	碗?		7.2		灰 黒	青 灰	"	・底面ケズリ痕
4	"	地輪陶器	"		9.0		釉:緑・茶	胎:白灰		緑釉か三彩
5	"	陶 器	碗	15.3	4.1	6.7	釉:薄緑茶	胎:黄灰	ロクロナデ・底面ケズリ・トチンあとあり	瀬川灰輪平碗 15C
6	"	"	"	13.5	6.0	(8.5)	釉:薄緑	胎:灰白	"	
7	"	"	鉢?		8.5		釉:灰白	胎:茶褐色	"	・底面回転糸切り
1	建物址 3	須恵器	蓋	14.3			青 灰	青 灰	"	・天井部回転ヘラケズリ
2	"	"	茶				淡青灰	淡青灰	"	緑色の自然釉
3	"	土師器	杯	13.9			灰 白	灰 白	"	
4	"	"	"	13.2			赤 褐	黒	内外面ヘラミガキ	内黒
5	"	"	"	15.8			黄 灰	黄 灰		
6	"	須恵器	"	13.9			青 灰	青 灰		
7	"	"	"		(6.8)		灰 白	灰 白		
8	"	"	"	14.7			灰白～灰	灰白～灰	ロクロナデ	
9	"	"	"		(6.4)		青 灰	青 灰	"	・ヘラ切り
10	"	"	蓋	17.3			灰 白	灰 白		
11	"	"	杯	15.5			淡茶灰	淡茶灰		
12	建物址 4	"	"	15.8			灰 白	灰 白		
13	"	"	"		(7.0)		青 灰	青 灰	"	・ヘラ切り
14	"	"	"		(7.4)		暗青灰	暗青灰		

表7 石器・石製品一覧表

No	器 種	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 質	備 考
1	石 礮	建 3	(20.5)	(13.0)	4.0	1.06	黒曜石	先端・片脚欠損 無牙凹基
2	敲 打 器	6住北外	143.5	50.5	29.0	300	砂 岩	敲き痕一片端、片側縁部
3	砥 石	溝 1	92.0	38.5	30.5	160	凝灰岩	破損後再使用 使用面—4 断面四角 線条痕あり
4	"	17 住	108.0	55.5	48.5	485	細粒砂岩	" —4 " 溝状痕あり
5	"	表 権	122.0	78.0	33.5	385	砂 岩	破 損 " —4 " 溝状痕あり
6	"	18 住	88.5	70.5	17.0	385	"	" —5 " 溝状痕あり
7	"	溝 1	94.5	40.0	35.0	260	凝灰岩	—両端以外の全面 断面半円形 線条痕多い
8	"	22 住	222.5	69.5	56.5	1,280	砂 岩	—3 断面四角 使用面に調整の打痕が残る
9	"	14 住	118.0	72.0	62.0	700	"	—1 溝状痕あり
10	"	22 住	117.5	83.0	48.0	640	チャート	—4
11	"	溝 1	74.5	58.0	53.0	485	砂 岩	破 損? —4 断面四角 片端に敲き痕
12	敲 打 器	8 住	202.5	58.0	40.5	985	"	四柱状礎 周囲に小さな敲き痕多数
13	丸 石	6住カマド外	82.5	70.0	59.5	450	安山岩	円 礎
14	"	6 住	54.0	52.0	48.5	175	砂 岩	" 敲き痕あり
15	"	"	50.5	43.5	24.5	75	"	円 板 礎

(材質鑑定は太田守夫氏による)

3 鉄製品

本遺跡出土の鉄製品は、表8・9の通りである。和釘22、紡錘車及びその一部と考えられるもの7、鉄鎌4、刀子6、鋸2、鎌1、工具1、不明品5の計48点である。出土地は住居址が11軒、土塚1・13、溝2及び遺構外である。和釘は7・8・14号住居址、土塚1・13等から出土しており、完形のものの中世の8号住居址から1点(27)のみで、全体の詳細は不明である。この完形品は長さ71mm、断面は長方形でありその他の出土品はいずれも断面形が1辺5～9mmの方形ないしは長方形を呈している。皿部は片方からたたきつぶして伸ばしたものが多く、さらにそれを折り曲げて皿部を造っているものは見当たらない。

紡錘車は、7号住居址から1点、8号住居址から2点が出土しており、さらに8号住居址からは紡錘車の1部と思われるものが3点みつまっている。紡錘車と確認できる3点(23, 36, 37)はいずれもおもり部が円盤状ではなく、団子状を呈しており、さらに23・36は同じ部位から突起物がでている。おそらく紐状のものを巻きつけておもり部としたのではないだろうか。

鉄鎌は、8・17号住居址から計4点が出土している(3～5, 41)。なかでも3は良好な残存状態である。その他はかえしの部分が明瞭でないもの、あるいは基部付近のみのものである。

刀子は、6・16・24号住居址から計6点出土(2・8・11・14)しているが、原形を推定できるのは2のみで全般に遺存状態が悪い。2は長さ133mm、その他は刃部から基部にかけての残存である。

17号住居址からは、短冊状の先の欠損した鉄製品が出土(6)しているが、たがねかまたはそれに類する工具の一種であろう。

6・10号住居址からは、鋸が1点ずつ出土(1・9)している。1は完形であるが、先端部までの長さが112mm、87mmと異なっている。9はおそらく鋸の肩の部分と考えられる。

7号住居址から鎌が1点出土(24)している。茎付鎌であり刃先の部分が欠損している。

溝1からはT字形の製品が出土(51)しているが、何かの留具かもしれない。

19号住居址から4点、21号住居址から1点、鉄製品らしきものが出ているが、その性格は不明である。尚、溶滓が1・5・6・8号住居址、鉄滓が1点遺構外から出土している。

(吉田 浩明)

表8 遺構別鉄製品一覧表

	和釘	紡錘車	鉄鎌	刀子	鎌	工具	鋸	不明	その他		和釘	紡錘車	鉄鎌	刀子	鎌	工具	鋸	不明	その他
1 住									溶滓2	17 住			3			1			
5 住									溶滓3	19 住									4
6 住				2			1		溶滓1	22 住									1
7 住	8	1			(1)					23 住		(1)							
8 住	11	2+(3)	1					3	溶滓2	24 住			1						
10 住							1			溝1									1
14 住	1									土塚1	1								
16 住				4						土塚13	1								

表9 鉄製品一覧表

No	出土地	出土No	製品名	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	6住	79	鋸	112	57	17	61.0	一方の先端部が87mmと短くなる。完形
2	"	宋 画	刀子	13.3	7	22	32.6	3片に分かれるがほぼ原形をとどめる
3	17住	1	鉄鏝	83	31	12	18.0	完形
4	"	91	鉄鏝茎部?	78	14	9	9.8	
5	"	91	"	76	11	10	12.1	
6	"	37	工具	100	36	15	55.1	たがねか
7	23住	4	不明	径36		3	9.7	円盤状呈す。紡錘車か
8	24住	床 画	刀子	68	32	12	31.0	刃部一基部の間残存
9	10住	6	鋸	56	16	16	20.7	材の部分残存
10	14住	24	和釘	45	7	7	8.0	断面方形
11	16住	13	刀子	132	6	13	28.3	形態の詳細は不明
12	"	15	"	54	6	13	8.1	刃部から茎にかけて残存
13	"	16	"	50	10	12	10.8	"
14	"	14	"	62	8	13	16.9	"
15	7住	21	和釘	30	8	8	5.9	鋼部残存 断面方形
16	"	22	"	27	10	8	5.7	" 断面長方形
17	"	22	"	21	7	7	2.8	" 断面円形
18	"	24	"	27	8	7	4.1	頭部" 断面方形
19	"	28	"	57	6	5	7.3	先端部欠損 断面長方形
20	"	29	"	31	7	6	4.0	鋼部残存 "
21	"	30	"	33	9	9	3.5	" 断面方形
22	"	33	"	48	8	6	9.6	先端部欠損 断面円形
23	"	23	紡錘車	78	8	8	12.3	完形
24	"	25	茎付鏝	247	刃部50	4	215.0	先端・基部欠損
25	8住	1	和釘	40	6	5	6.1	先端欠損 断面長方形
26	"	2	"	60	7	5	13.6	先端わずか欠損 "
27	"	3	"	71	9	5	11.5	完形 "
28	"	5	"	25	6	6	1.8	先端部残存 断面方形
29	"	6	"	46	5	5	6.8	頭部" "
30	"	10	"	56	7	5	6.9	先端部欠損 断面長方形
31	"	ベルト	"	44	6	5	5.2	鋼部残存 "
32	"	"	"	4.1	7	5	6.8	先端部欠損 "
33	"	"	"	18	5	4	1.2	鋼部残存 "
34	"	12	"	71	6	3	13.6	先端部直角に曲がる"
35	"	覆土	"	62	6	5	14.7	"
36	"	14	紡錘車	122	径22×18	軸径4	25.9	
37	"	9	"	82	径20×19	軸径10	26.2	
38	"	11	紡錘車の軸か	51	径6		4.2	断面円形
39	"	13	"	65	径5		10.5	"
40	"	覆土	"	19	径7		3.4	"
41	"	7	鉄鏝	69	7	5	7.7	茎部残存
42	"	4	不明	35	13	2	4.3	
43	"	8	"	27	11	9	4.9	鏝のため形状不詳
44	"	8	"	28	5	3	0.8	断面長方形で中空
45	21住		不明	79	径41		205.0	管状呈す
46	19住	3	不明小片	28	16	10	4.5	先端部か
47	"		"	18	16	11	3.1	板状呈す
48	"		"	22	12	19	3.1	棒状呈す

No.	出土地	出土No.	製品名	長さ(mm)	巾(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備 考
49	19住		不明小片	15	14	13	2.0	
50	土坑1	1	和釘	69	6	4	9.5	完形 断面楕円に近い
51	土坑13	1	*	30	4	4	3.4	基部か 断面方形に近い
52	溝1	2	留め具か	60	45	15	30.8	T字形呈す
	6住	6	漆滓	53	28	14	24.1	
	1住	22	*	50	27	20	26.0	
	*	28	*	35	30	25	32.5	
	5住	9	*	39	28	23	30.5	
	*	9	*	28	20	19	13.1	
	*	9	*	25	20	19	9.4	
	8住	床面	*	36	28	20	21.2	
	*	床面	*	33	18	10	10.4	
	遺構外		鉄滓	55	38	28	66.5	団塊・炭化材付着

表10 銅銭一覧表

No.	出土地	出土No.	名称	初鋳年	径(mm)	重量(g)	表面	裏文	図番号
1	5住		開(標)通宝	1206	23	0.76以上		1/2程度残存	
2	7住		元祐通宝か	1093	25	2.96	*		1
3	8住	1	天聖元宝	1023	25	3.07	*		2
4	*	3	皇宋通宝	1038	24	2.88	*		3
5	*	5	嘉祐通宝	1057	25	2.13	*		
6	*	6	元豐通宝	1078	24	3.08	*		4
7	*	2	紹聖元宝	1094	24	2.63	*		5
8	*	4	不明		22以上	0.96以上	*	腐蝕激しい	
9	20住	1	太平通宝	976	24	2.84	*	14と表面密着で出土	6
10	*	覆土下層	天聖元宝	1023	25	2.07	*		7
11	*	4	皇宋通宝	1038	24	1.96	*	一部欠損	8
12	*	3	熙寧元宝	1068	24	2.50	*		
13	*	5	元豐通宝	1078	25	2.15	*		
14	*	2	紹聖元宝	1094	24	2.39	*		9
15	墓址2		不明		24	1.48以上	*	○元通宝か○元宝 1/2残存	
16	*		*		21以上	0.52以上	*	下に「天」或いは「大」の字が見える	
17	溝4		熙寧元宝	1068	24	2.69	*		10
18	*				24	4.66	*	19と密着出土	11
19	*				23		*		

骨片

2・6・8及び14号住居址で検出された。6住においては、かまどとその周辺に集中しており、小動物の糞骨らしきものが確認された。

4. 青銅製品(第54図)

青銅製品は5点出土したがいずれも住居址内よりの単独出土でこれに伴う特別の遺構はなかった。1は第6号住居址床面下部より出土した腕で胴部に僅かに穴があるほかは完形で、口径13.7cm、深さ5.5cmの丸底のやや深めの腕で無蓋である。口縁部は内側に傾斜して3mmと肥厚しているが器壁全体はロクロ引きにより薄手に仕上げられている。器外面には細い二本単位の沈線が2組づつ口縁部、胴部、底部にめぐり、底部中心の湯口切りはなし部分の僅かにもり上がった部位にも二本の沈線がめぐっている。器内面には器面と平らで樹木の文様が浮き出されている。

青銅製腕、水瓶などは鑄造され、ロクロにより仕上げられるが⁽¹⁾特に外面ははっきりとけずりあとが観察される。内面樹木文様の浮き出しは凹型鑄型で鑄込み、凸型として表わされた文様部分をも含めて内面をけずり上げたもので、密度の差によって文様を浮き出させている⁽²⁾毛利光俊彦氏の論文⁽³⁾ではA Iに分類されるものと酷似している。2は口径3cmの水瓶又は花瓶の口縁から頸部である。口縁部はまっすぐに上り、二本の1mm近いやや太めの沈線を2本めぐらせ、頸中部には幅3mmの低い隆帯を二分する沈線がめぐり、第19号住居址出土である。3は第7号住居址の六器で焼け溶けて変形しているが、径5.8cmあまり、腕受けの圏帯は径2.5cmである。外縁部は幅2.5mm程の肥厚した部分がある。底内外には灰がついている。4は第8号住居址出土の腕の底部とも思われるもので、僅かに端部が持ち上っており曲線を描くらしい。内面には炭化した木質部が付着している。5も第8号住居址出土で、つぶれかかった状態のためはずしてみないので単なる観察にすぎないが、小型の高台付銅腕が2コ重なった状態であると思われる。口径は7cm位であろうか。口縁は玉状になり、内側と外側の間には土とともに針葉樹の木片が入っている。なお外側腕の高台部分には内側腕の欠けた部分が、青銅片が付着しており、欠けた部分から内側腕の高台らしきものが窺える。これら青銅製品はいずれも仏器であり、1については住居址が奈良時代と思われるのでその時代に、3は常滑壺(14C)、4・5は瀬戸灰釉平碗(15C)⁽⁴⁾の出土している住居址であり、2をも含めて中世仏具とみたい。(神沢昌二郎)

- 参考文献 (1)『新版考古学講座』9「金工」中野政樹、雄山閣
(2)大町高校、森義直氏の指示による
(3)「古墳出土銅腕の系譜」毛利光俊彦、考古学雑誌64—1
(4)愛知県陶磁資料館、赤羽・郎氏の指示による

第4章 結 語

1. 南栗遺跡について

本遺跡を中心として奈良井川西岸地区を巨視的に見た場合、以前から奈良井川段上、三の宮、北栗地籍に縄文中期～古墳時代の遺物を出土する事が知られており、それに次ぐものが神林の境窪地籍（弥生）さらに近年の古墳調査で知られるように新村地籍と下ってくる。

今回の調査で検出した遺構のうち、6、17、3、4、23、24号住居址等は遺物よりみてむしろこれに次ぐと見てよい。遺構的には6、17、23、24号は巨大な規模を呈し、カマドには長い煙道を設けている。これらから得られた遺物は資料的にも貴重なものと言えよう。量的に見ると大形住居址からの多量に比べ、3、4号等小形のものからは非常に少ない。該期の遺構は他にも建物址3、4がある。特に3は規模も大きく建て直しが2回行われ、長期化した定住を示しており、4も同様であった。又、6号からは佐波理鏡が出土し、特殊な遺構として考える必要がある。石組カマドをもつ22号住居址はこの直後に比定される。

平安中期には9、18号住居址がある。近くの神林下神遺跡⁽¹⁾に比べるとこの2軒は少ない

平安末期、もしくはそれに近くなると1、2、10、14、15、16号住居址と再び増加している。この時期の住居址覆土は大きな石を含み、青灰色系の土色を呈するものが特徴的であり（17地点）遺物はかなり多い。

中世になるとまず5、21号住居址がある。2軒とも非常に浅い。これに対して7、8、20号住居址は非常に深い堅穴である。遺物は少ないが青銅製品に特殊なものを見る。高台付佐波理鏡、六器水（花）瓶等である。現了智上人墓近くには火葬墓と、墓と見られる集石があり、墓域としての成立を見せている。又、東側（東西トレンチII）に検出した配石は薬師堂、阿弥陀堂という字名を起因させた遺構を想定させる。

調査、坪掘り等で知り得た用地内の遺跡範囲は栗林神社の南西側から南東は乃木殿周辺迄と考える。トレンチを見ると複数の住居址が明確に出現しており、とくに南北トレンチには砂利層により破壊された住居址を認めた。未調査のため遺構の時期は不詳であるが、前述した時期の範囲を出るものではないと見ている。検出面への礎の露出は17地点にあり、坪掘りでは地点が接近していても極端な土層の違いを見せている所（6と16地点）もある。目につく礎類はほとんどが鎮川系⁽²⁾もので鎮川の氾濫もしくは蛇行により度々この地に水害をもたらしていたのであり、本遺跡で空白となった時期はこれらによるものと考えるのは早計であろうか。ちなみに現在の鎮川は北東～北へ向った

流れが、この地区の南側で東へ向きを変えている。

このほか溝5本を検出したがこれらは全てが人為的なもので、溝4は奈良～中世のものであり特に深い。他はいずれも切り合った遺構より新しい。溝1以外は短い範囲しか調査できないが、溝5が南東へ向う以外は全て東下しており排水路として考えたい。

2. 条里的遺構について

今回調査では遺構検出の北側に南北80m、東西120mのトレンチを掘って条里遺構の手がかりを求めたが検出されなかった。南北トレンチはほぼ中間地点で幅5m余りの砂利層を検出した。砂利層は北東に土手状に続いており、その厚さから自然堆積であり人為的につくられた道などではないことは明らかである。この地は鎮川の影響が非常に強く、梓川水系からの影響は南北トレンチ北端を流れている堀川には残るがそれ以南には及んでいないと思われる。つまり条里遺構をとらえ得るとしたら堀川以北であり、航空写真で単純に水田の地割をみるかぎり高綱中学校寄りか水田部落寄りの方がとらえやすいのではないかと考えられる。なお信濃史学会でも条里遺構調査を行っており58年度は水掛を中心に調べられた由であるのでその成果を期待するものである。

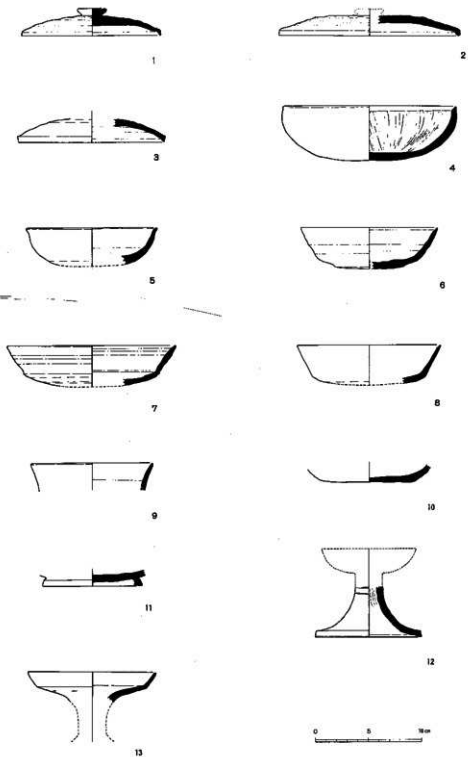
3. 調査を終えて

ここ数年米奈良井川西側において県営ほ場整備事業が続いており、それに伴って発掘調査が継続されている。そのため今まで不鮮明であった奈良井川左岸の低地における遺跡が解明されかけている。その第1は笹賀地区における低地の縄文時代の集落であり、第2は鎮川を隔てた神林下神遺跡と本遺跡における奈良時代より平安時代、更に中世に至る爆発的とも思える開発の大きさを感じていることである。両遺跡からは奈良三彩小壺、佐波理碗など、一般庶民には縁のない高級品が出土していることなどから推して、権力者、寺院などの存在を窺わせると共に、平安時代はじめに信濃国府が筑摩の地に移されたといわれており、飛躍的に言えば本遺跡周辺が交通の要衝の地であり、公的機関に類するものがあつたのではないかと考えられる。

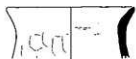
58年度緊急発掘調査は4件重なつたため充分な調査・整理を行う人員、時間がなく、特に本調査では発掘現場引き上げから報告書作成まで正月をはさんだ2ヵ月間で充分整理、検討することができなかつたその点記録保存という文化財保護の立場からは不満の残るところではある。中心土地改良事務所、島立土地改良区、島立公民館、南栗町会、公民館、栗林神社氏子総代の方々には一方ならぬご理解ご協力をいただいた。記して御礼申し上げる。また日没の早い12月の寒気の中で調査に従事された調査員・作業員の方々、整理事業にご協力いただいたの方々、そして報告書づくりのために日曜日も返上して連日10時すぎまで励んでいただいた大学生諸君他の方々、本当にありがとうございました。記して感謝申し上げます。(神沢昌二郎)

(1) 下神遺跡は58年度に調査を行い、住居址7軒、建物址35基等が検出されている。

(2) 太田守大氏の指示による。



第35图 第6号住居址出土土器(1)



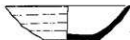
14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



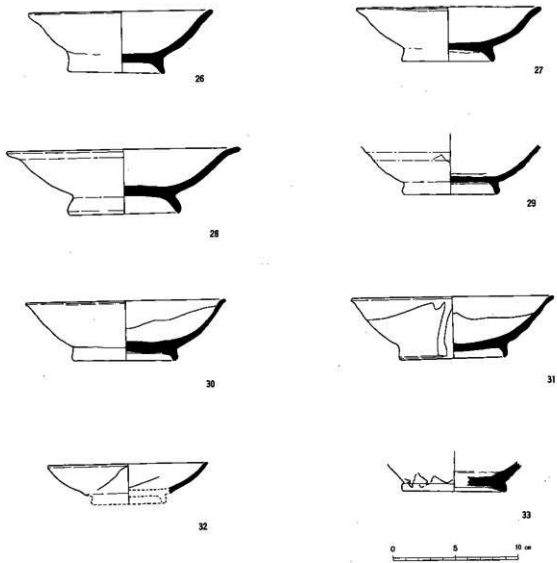
24



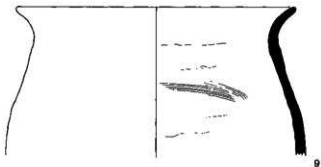
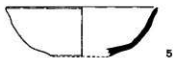
25



第36图 第6号住居址出土土器(2)



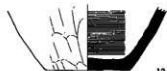
第37图 第6号住居址出土土器(3)



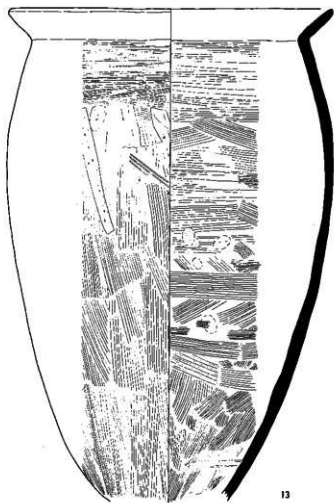
第38图 第17号住居址出土土器(1)



11



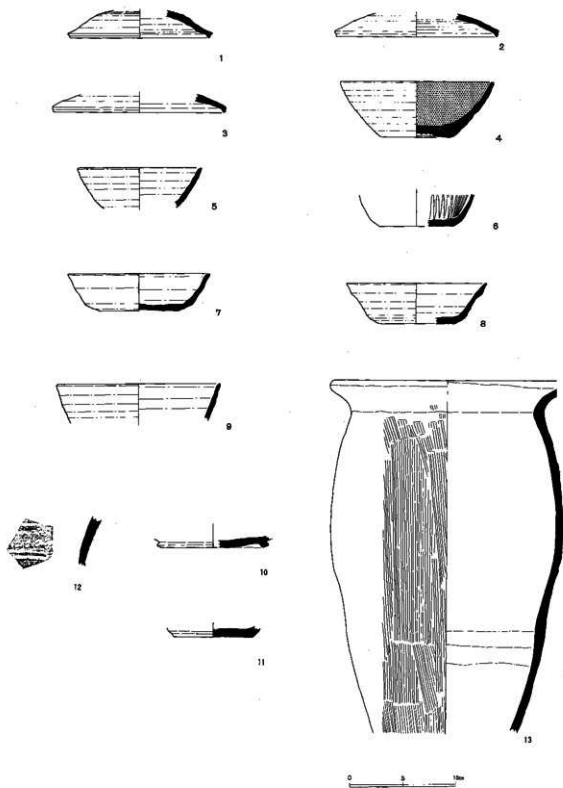
12



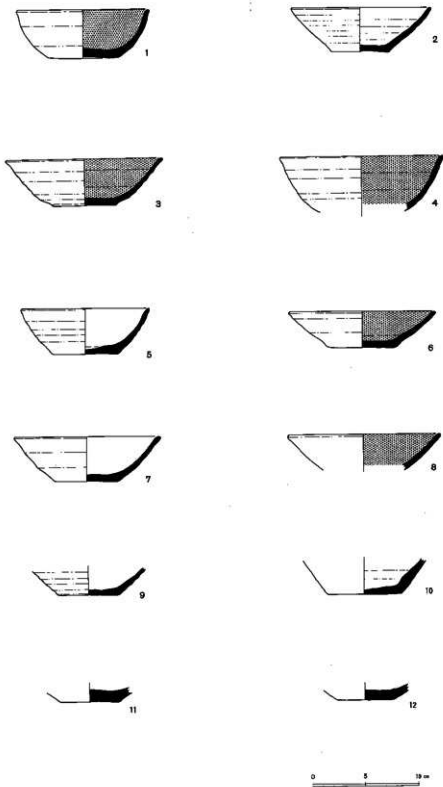
13



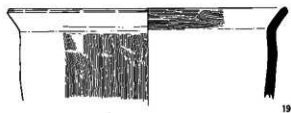
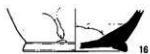
第39图 第17号住居址出土土器(2)



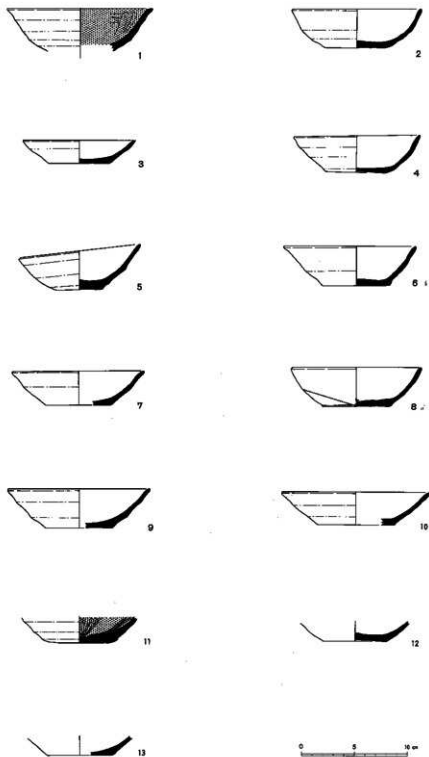
第40图 第18号住居址出土土器



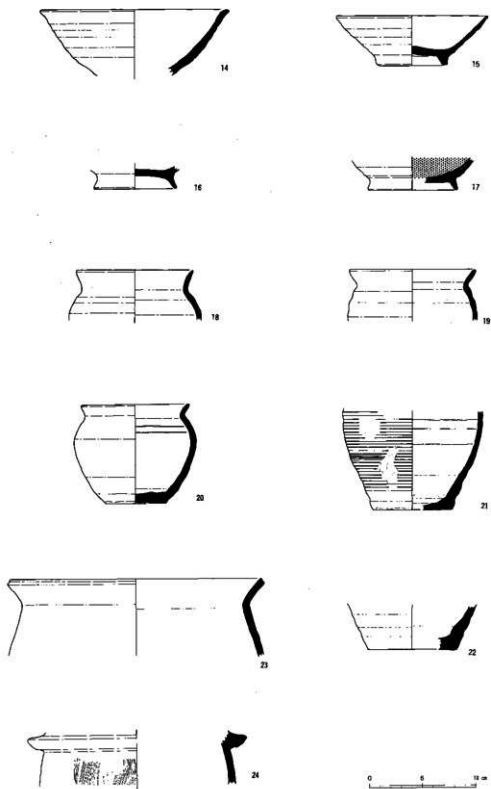
第41图 第1号住居址出土土器(1)



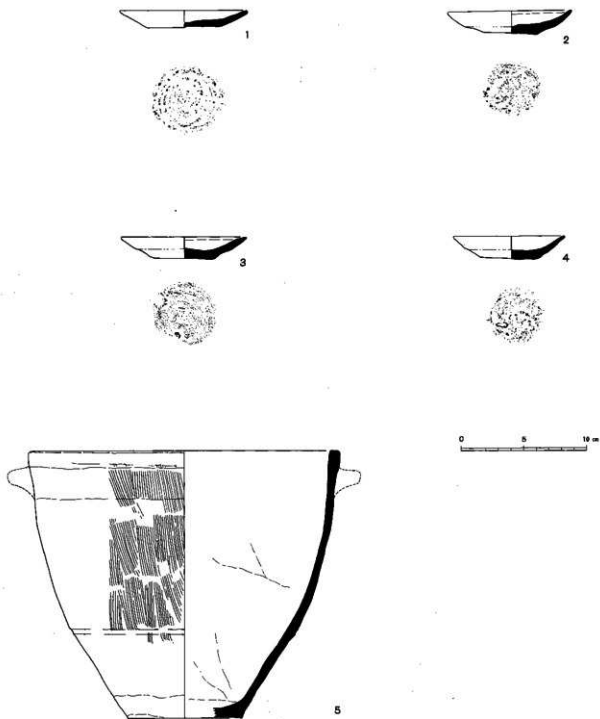
第42图 第1号住居址出土土器(2)



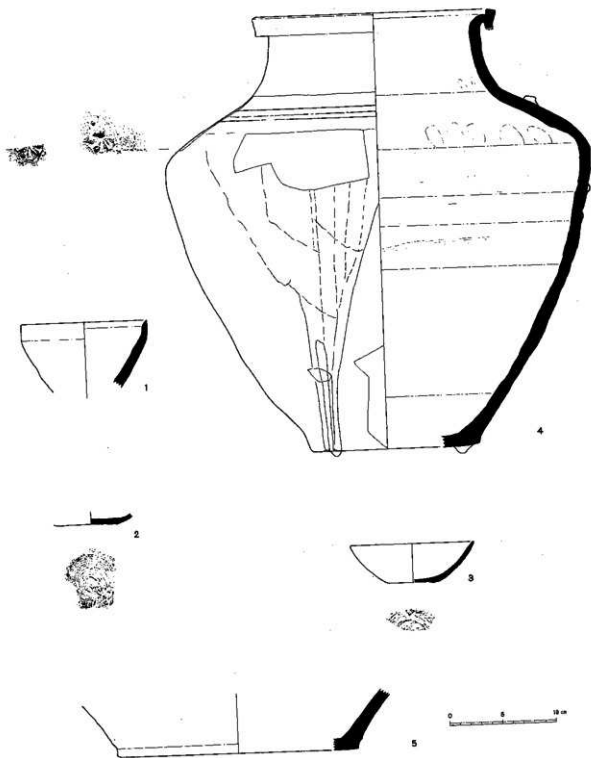
第43图 第14号住居址出土土器(1)



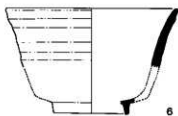
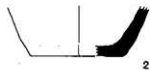
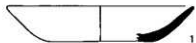
第44图 第14号住居址出土土器(2)



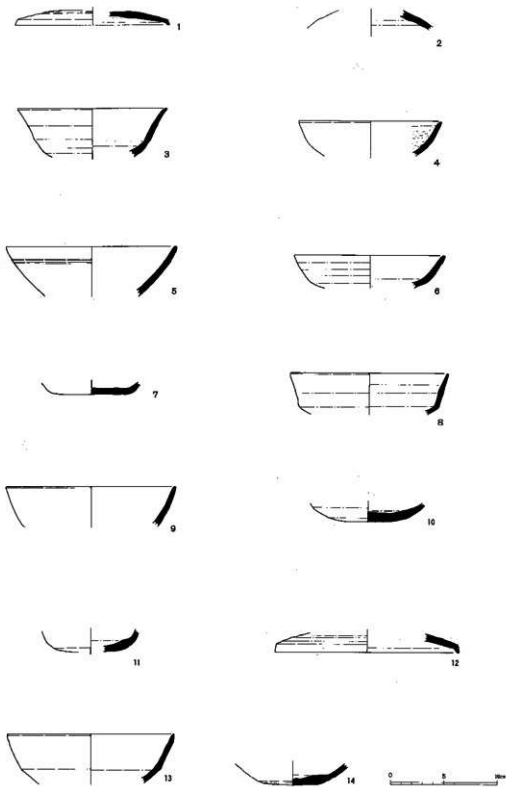
第45图 第5号住居址出土土器



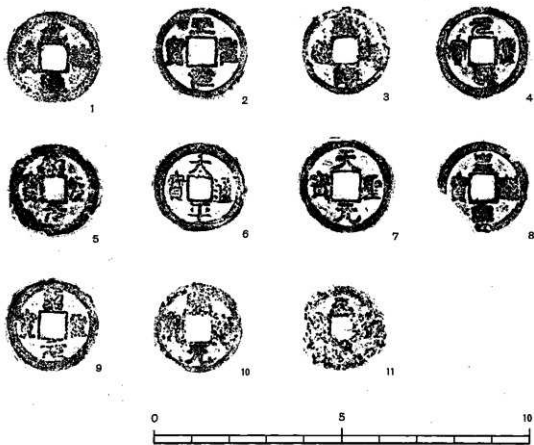
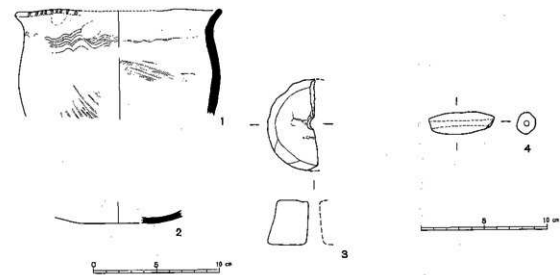
第46图 第7号住居址出土土器



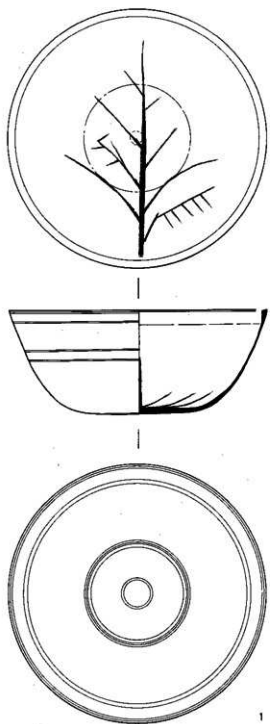
第47图 第8号住居址出土土器



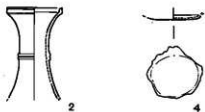
第48图 建物址3, 4出土土器



第49図 その他の遺物、土製品、銭



1

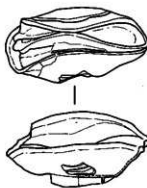


2

4

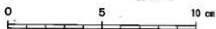


3



5

模式图



第50图 青铜製品

図 版



図
版
1

第13地点 坪掘り



畔に露出したカマド



東西トレンチ I

調査風景



調査風景



調査風景





南北トレンチⅠ
礫堆積部



南北トレンチⅠ



東西トレンチⅡ

図版
4



6号住居址
遺物出土状況



同 遺物出土状況



6号住居址カマド断面



6号住居址壁
(炭化したワラ材)



同 出土遺物

6号住居址
上層出土遺物



同 貼床下
青銅製品



同上
青銅製品





17号住居址



同
遺物出土状況



同
カマド奥壁

17号住居址
カマド断面

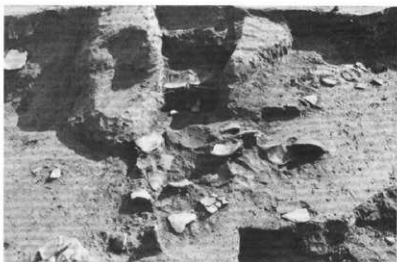


同
出土鉄鏝



18号住居址



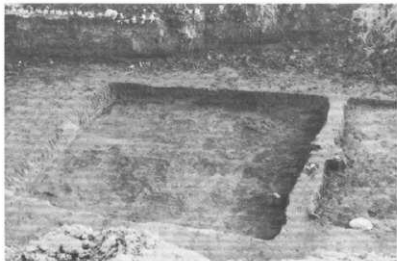


18号住居址カマド

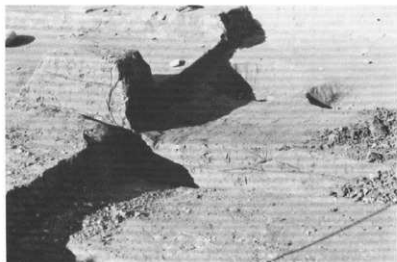


1・2号住居址・土壇17~19 (手前)

1号住居址



同 カマド

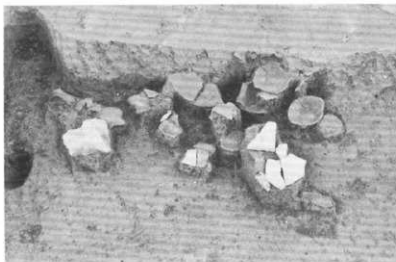


2号住居址





14号住居址



同
遺物出土状況



5・21号住居址

5号住居址
遗物出土状况



同
出土遗物



7号住居址

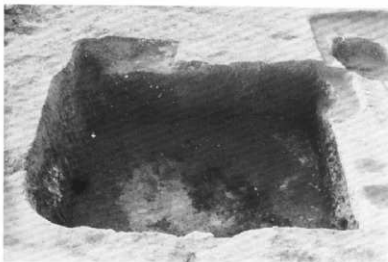
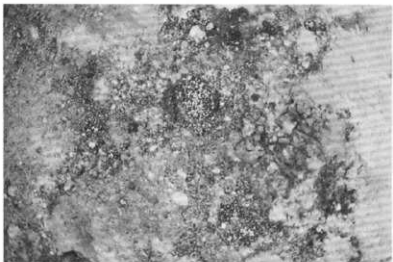




図
版
13

7号住居址
遺物出土状況

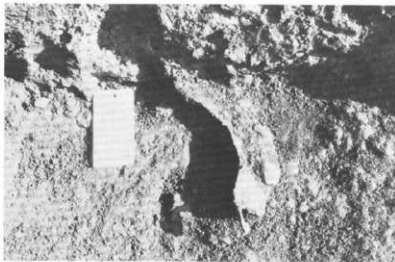


同
炭化穀類
出土状況

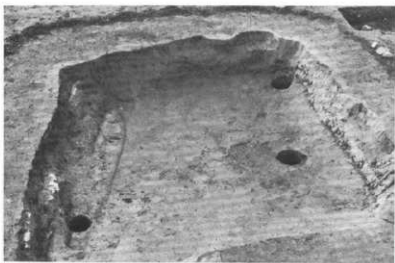


同
出土炭化材

7号住居址
出土鉄鎌

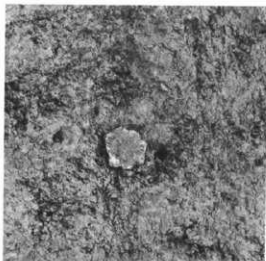


8号住居址



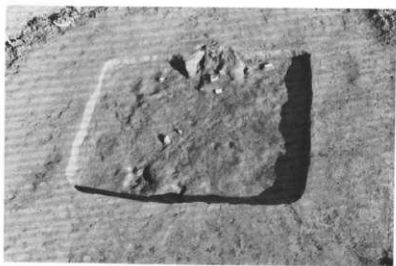
同出土
青銅製品





図版
15

8号住居址
出土青銅製品



3号住居址



4号住居址

4号住居址
及び建物址3

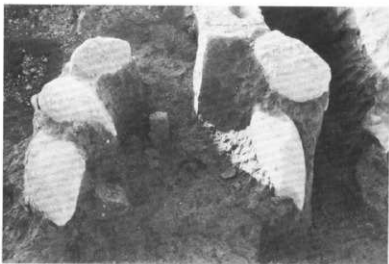


4号住居址
カマド断面図



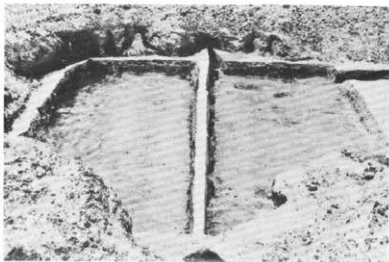
22 (手前)
23号住居址





図版
17

22号住居址
カマド



24号住居址

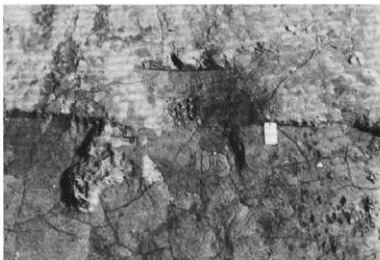


9号住居址
溝 1

10号住居址



同 カマド



15号住居址
土坑1

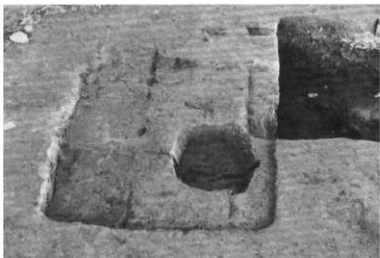




図
版
19

15号住居址
遺物出土状況



同 出土遺物

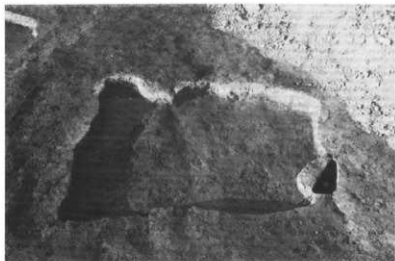


16号住居址
土坑2

20号住居址



19号住居址
土坑10



19号住居址
出土遺物





図版
21

21号住居址



同 出土遺物

25号住居址

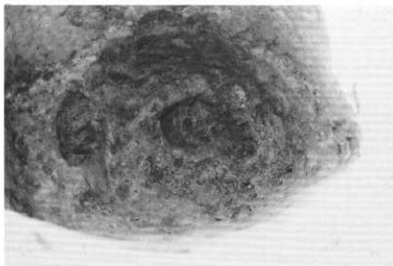


建物址3

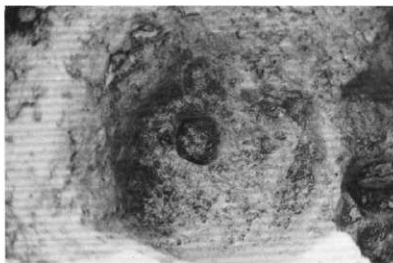


建物址4
土壇9

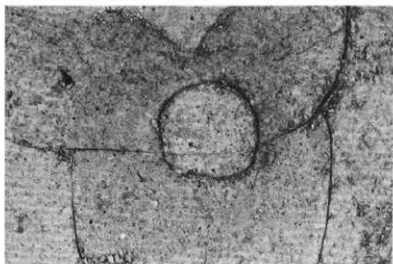




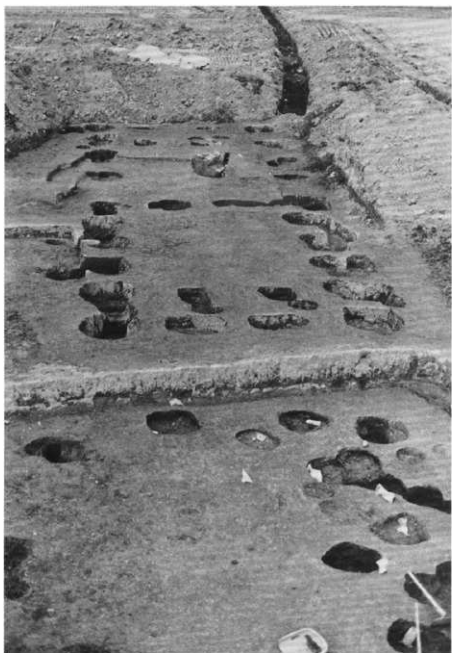
建物址3
柱痕跡



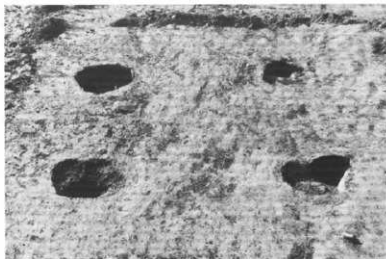
同
柱痕跡



建物址4
柱痕跡



建物址3・4
(手前17号住居址)



建物址 1



建物址 2
土壇 3~7



土壇 11~14



溝 1



墓址 1



墓址 2



图
版
27

墓址3



墓址3
断面

図
版
28



集石 1



雪の風景
(11地点)



图
版
29

6-5



6-7

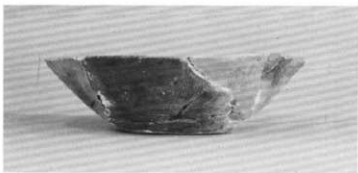


6-21

图
版
30



6-22



6-24



6-27

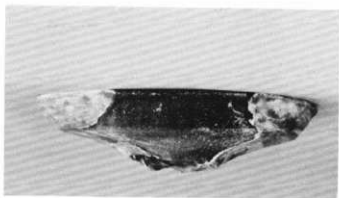


图
版
31

6-30



6-31



6-13

图
版
32

6号住居址
出土佐波理鉢



17-1



17-5





17-6



17-7



17-8

图版
34



17-9



17-13



18-4



18-7



1-1

图
版
36

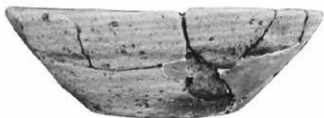
1-2



1-3



1-5





1-6



1-7



1-18

图
版
36



14-4



14-5



14-6



圖版
39

14-7



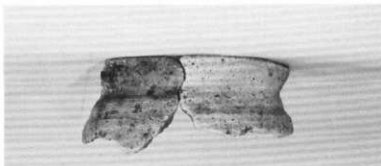
14-8



14-15

版
40

14-19



14-20



14-21



图版
41



5-5



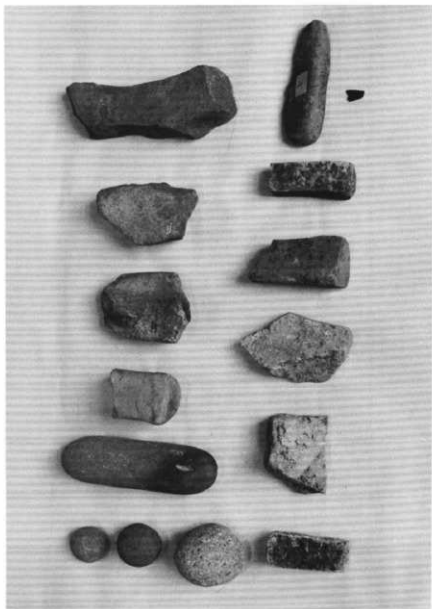
7-4



8-5



8号住居址
出土佐波理碗



石器・石製品

松本市文化財調査報告No.32

— 松本市島立南栗遺跡緊急発掘調査報告書 —

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 中信凸版印刷株式会社

